

## 朝鮮初期の文廟祭と郷村社会

桑野栄治

【欧文表記】Eiji Kuwano, The Rituals Performed at the Confucian Shrine and the Rural Communities in the Early Choson (朝鮮) Dynasty

【要旨】本稿では、朝鮮初期（ほぼ一五世紀に相当）における国家祭祀研究の一環として、王都漢城と地方の文廟で実施された積奠（毎年春秋に孔子を祀る儀礼）の運営とその実態を、王朝政府による制度化と郷村の対処を中心に考察した。

高麗から朝鮮への王朝交替期には各地で郷校が復興し、本来の教育機能に加えて文廟の祭祀機能も徐々に回復しつつあった。太宗は積奠儀の頒降を明に要請し、明の永楽帝が「儀は本俗に従う」ことを許可すると、朝鮮政府は祭祀儀礼の制度整備を本格化させた。太宗一三年（一四一三）の祀典改革は郡県制の改革時期と重なり、積奠の整備も王権強化のための地方統治政策と連動して進む。しかし、世祖代以降、守令の怠業と教官の資質低下がしばしば問題となり、王朝政府はその対応に腐心した。そこで王朝政府は地方祭祀の運営・管理を守令に一任し、さらにこれを觀察使に監督させることによって王権を頂点とする中央集権的統治体制を整備した。郷村社会を統制すべく、積奠に代表される広域の祭祀組織とその主宰者を地方行政機構のなかに取り込んだのである。

ただし、これはあくまで統治者側が定めた制度であり、あるべき理念であった。たしかに『国朝五礼儀』と『経国大典』の規定は王朝政府の理念を示すものではあるが、郷村の実態は必ずしも理念どおりではなかった。文廟祭を通してみた場合、朝鮮初期の礼と法の規定は、むしろ統治者側の理念と郷村社会の実態に落差があったことを示唆する。

【キーワード】朝鮮初期、国家祭祀、祀典、積奠、郷村社会、地方行政、郷校、文廟、觀察使、守令

はじめに

一 高麗末・朝鮮初の文廟整備

二 対明交渉と祀典の改革

- 1、積奠の整備と対明交渉
- 2、太宗一三年の祀典改革

三 郷村社会における積奠の実相

1、世宗代の積奠

2、王都と地方の格差

3、積奠主宰者としての守令

4、積奠の運営とその実態

むすび

## はじめに

筆者はこれまで、対象時期を朝鮮王朝（李朝。一三九二―一九一〇）の建国から『経国大典』（いわゆる『乙巳大典』）実施の一四八五年までとし、朝鮮初期に特徴的とみなしうる国家祭祀を個別に取りあげ、朝鮮祭祀制の特性を抽出することによって王朝国家の性格や王権の特質、对中国観を考察してきた。<sup>①</sup> 国家祭祀とは、朝廷や邑（郡県）の官衙が主宰する祭祀儀礼である。とくに、従来看過されてきた五礼（吉礼・嘉礼・賓礼・軍礼・凶礼）運営の規範となる『国朝五礼儀』（二四七四年成立）を活用し、<sup>②</sup> その結果、まず朝鮮の開国神である檀君を祀る祭祀儀礼が新王朝の正統性を主張するための手段であったこと、朝鮮王朝が高麗（九一八―一三九二）王家の末裔を民間から捜しだし、これを王氏祭祀の管理者として地方行政機構に組み込んだことを明らかにした。次に、儒者官僚が儒教的政治理念に立脚した王朝国家の建設を志向して礼制研究を積み重ね、宗主国である明の制度を典範として仰ぎながらも朝鮮の実状に即した国家祭祀を制度化したことを明らかにした。いずれも朝鮮初期の国家祭祀研究の一環をなすものであり、朝鮮国王を頂点として祭祀の組織とその主宰者を王朝政府の行政機構のなかに組み込んだ点に注目してきた。

さて、国内外の当該分野の研究状況をみると、朝鮮祭祀制の研究は朝鮮中近世の他の分野に比して盛んとはいえない。ごく最近になって、高麗末期から一七世紀中葉までの各種儒家文集から祭祀関係資料を抜粋した儀礼資料集成が韓国で出版されたが、<sup>③</sup> その実用性は今後の課題となる。最近まで祭祀制関係資料それ自体さ

えも収集・整理されていなかったことは、逆説的には当該分野の研究の立ち後れを裏づけていよう。朝鮮初期の場合、現状では五礼全般の制度的沿革を概観・整理した段階にとどまっており、朝鮮祭祀制の運用体系を中央の祭祀制と地方社会との関連から論じた研究成果はいまのところない。<sup>④</sup>

その一方で韓国では近年、地方史料の発掘が進むと同時に郷村社会史研究が進展し、<sup>⑤</sup> 郷校（地方の国立学校施設）の祭祀機能にも関心が注がれている。そこでは、朝鮮後期の郷校における祭祀機能の強化の理由として、壬辰・丁酉倭乱（文禄・慶長の役）後に朱子性理学（新儒学）が社会の基層にまで普及したことが関連がある、あるいは郷校の教育機能の衰退によって祭祀機能が顕著となった、と理解されている。<sup>⑥</sup> もちろん、こうした見解は朝鮮後期の諸史料を駆使した緻密な実証的研究から導かれたものではあるが、朝鮮初期の国家祭祀体系と郷村社会における各種祭祀の運営とその実態を十分に検討・分析したうえでの見解とはみなしがたい。

朝鮮王朝は朱子性理学を統治理念として建国され、<sup>⑦</sup> 一五世紀には礼と法をはじめとする文物制度の整備を進めていった。筆者はこの理念の可視的な実践の場こそ朝廷や地方の官衙で挙行される国家祭祀の空間であったと考えており、当面の課題は、朝鮮王朝の祭祀制が確立していく途上にある初期の運用体系を説明することにある。すでに、朝鮮初期の祭祀制運営に密接に関連した礼曹以下の諸官庁の職掌と機能については、奉常寺を中心にその成果の一端を公表した。<sup>⑧</sup> これを踏まえ、本稿では国家祭祀体系と郷村社会との関連様相について考察する。具体的にはまず、王朝政府

が地方の官衙に命じた積奠<sup>せきでん</sup>の整備過程と運営の実態を究明する。積奠とは毎年春秋に孔子を祀る文廟儀礼であり、王都漢城の最高学府である成均館と地方の郷校で実施された。積奠は朝鮮の各地にみられる祭祀儀礼であり、したがってこの文廟儀礼は国家祭祀の運用体系を考えるうえで格好の素材となる。その考察にあたっては、高麗末・朝鮮初の文教政策、祭祀の制度化をめぐる明との交渉、王朝国家による地方統治政策を視野に入れることにする。次に、儒者官僚である地方官が積奠の運営に関与したかについて分析する。従来、朝鮮初期の文廟儀礼に関してはいくつかの研究成果が提示されたものの、史料の制約上、上からの制度化が論述の中心となり、地方の郷村における積奠の運営とその実態が明らかにされたとはいえない。ここでは実録記事のほか、地理志・法典・礼典を活用しつつ、理念と実態の乖離に迫ってみよう。

以上の観点から、本稿では文廟祭祀儀礼の制度化と運営の実態を王朝政府と郷村社会の双方向から照射し、国家祭祀制度の運用体系を文廟祭の側面から明らかにしたい。

## 一 高麗末・朝鮮初の文廟整備

高麗王朝では王都開京の国子監（のち成均館）と州府郡県の郷学（郷校）に文宣王廟（文廟）が付設され、廟庭の宣聖殿（のち大成殿）には孔子と十哲のみならず新羅の崔致遠（八五七〜？）・薛聰を従祀した<sup>10</sup>。とくに朱子性理学が導入された高麗後期になると、仏教排斥と相俟って文廟儀礼の受容とその実践をうかがわせ

る記録が多い<sup>11</sup>。元の支配下にあった忠烈王三〇年（一三〇四）には、安珦（安裕）が当時荒廃していた国子監と文廟の復興につとめ、孔子の画像のほか祭器・樂器等を江南地方から購入させたこともよく知られている<sup>12</sup>。朱子性理学発達の本拠地であった江南地方では蔵書家によって多くの書籍が刊行されており、忠肅王元年（一二二四）に成均館がここから書籍一〇八〇〇巻を購入したことも記録に残る<sup>13</sup>。

ただし、高麗時代に積奠が地方の郷校において実際にどの程度運営されたのかについては定かでない。たしかに『高麗史』礼志は「諸州県文宣王廟」の項目を立てており、積奠儀と三献官に関する規定も詳細であるが、これをもって高麗の邑単位で文廟祭祀制が確立していたとは即断できない。高麗末期の郷校の実態をみると、たとえば至正七年（忠穆王三、一三四七）五月に李穀（一二九八〜一三五二）が残した「寧海府新作小学記」によれば、「本国郷校の制は廟学同宮にして襲るにちかし」とあり、官衙の東北に新築された寧海郷校（慶尚北道盈徳郡盈徳邑）の構造は「當中にして殿あり、以て魯司寇之像を垂る。左右は廡と為し、以て擊蒙の所と為す」と伝える<sup>14</sup>。寧海郷校には孔子の像を祀る廟殿はあったが、明倫堂に相当する学舎がなく、東西の両廡を講学の場として利用していたのである。このような構造は他の地方にもみうけられる。

A（前略）今上即祚、尤重学校、己巳（恭讓王元年〔一三八九〕、筆者註）冬、吾同郷金君綵、由觀察判官量田称職、選補是州監務、理任踰年、弊去民安、可興功役、乃謀於衆曰、理民以教化為本、此邑雖小、饗舍無所、若不營構以育人材、殊非国

家委任興学之意、乃相旧址、剡荆榛徐砂土、鳩材埴瓦、堅屋一間、左右前後、皆翼以檐、奉安先聖之神、以為糴菜之殿、東西置廊各四楹、以為諸生講業之所、其南置門一間、旁置庖厨亦四楹、仍飾燠室、以為教官燕息之处、制約而位備、功簡而事成、自辛未（恭讓王三年、筆者註）正月而始役、及秋而訖、（中略）洪武二十四年蒼龍辛未（恭讓王三年、筆者註）冬十有二月壬戌、〔陽村集〕卷一二、記類、提州郷校記）

右に掲げた史料Aは王朝交替直前の堤州郷校（忠清北道堤川市）の実態を伝える。恭讓王元年の冬に監務として堤州に着任した金綵が荒廃していた郷校を再興した美談であり、同郷の縁から権近（二三五一―一四〇九）が依頼を引き受けてこの「提州郷校記」を残した<sup>17</sup>。権近が四書五経の初学者のために『入学図説』（恭讓王二年）を著述した政治家・儒学者であることはいままでもない。この郷校記によると、小邑<sup>18</sup>といえども学舎がなければ人材を育てることはできない、と金綵は堤州の民衆を説得し、旧址を調査のうえ郷校の建設に着手した。再興事業は恭讓王三年正月に始まり、その年の秋には竣工したという。注目すべきは堤州郷校の構造である。急場のこととはいえ、先聖を祀る廟殿は建築されたが、東西の廊廡は講学のための施設であった。この構造はさきにみた寧海郷校の事例と共通する。『高麗史』礼志の「諸州県文宣王儀」の規定にしたがえば、郷校では先聖先師はもちろんのこと、東西両廡の従享位にも祭酒を捧げる儀礼を執り行わなければならない。にもかかわらず、寧海郷校と堤州郷校では大成殿の前面左右にある両廡は先賢を従祀するという祭祀機能を果たしていない。むしろ、教育機能を果たす場となっている。後述するように、朝鮮初

期の『国朝五礼儀』の規定によれば、県レヴェルの郷校では従享位を祀る両廡の設置は免除されている（後掲史料P）が、これは多くの郷校が高麗末の遺制を継承したためではないかと推察される。

高麗では邑の大小にかかわらず郷校を設けて学校教育を実施していたことはまちがいないだろう。ただし、教育機能はともかく、すべての郷校が『高麗史』礼志の規定どおりに先聖先師以下の諸賢を祀る文廟儀礼を忠実に実施したかどうかについては疑問を呈せざるをえない。高麗は吉礼の体系化に際して、地方にいたるまで文廟儀礼の制度化を政治的に構想していた、とみるのが妥当な判断ではないだろうか。理念と実態の乖離、と表現してもよい。

さて、一三九二年に朝鮮王朝を開創した太祖李成桂（位一三九二―九八）はその年八月、芸文春秋館大学士閔霽（一三三九―一四〇八）に命じて文廟に釈奠を行わせた<sup>19</sup>。太祖は即位を宣言する教書のなかで「儀章・法制は一に前朝の故事に依る<sup>20</sup>」と表明しており、前朝高麗の旧制にしたがって実施したのであるが、高麗から朝鮮への王朝交替直後、はじめての文廟儀礼である。太祖が陰暦八月の最初の丁の日に釈奠を命じたことは、礼を重視する新王朝の姿勢を示すものといえよう。礼に通じた閔霽は高麗末期より礼曹の職を兼ね、朝鮮王朝に仕えたのちも国家のさまざまな典礼を詳定した<sup>21</sup>。もちろん、ここにいる文廟の所在地は新都漢陽（漢城）ではなく、開城である。その三日後、礼曹の長官であった趙璞（一三五六―一四〇八）らは新王朝の国家祭祀体系を整備すべく、次のように五項目にわたって上書した<sup>22</sup>。

（1）宗廟・籍田・社稷・山川・城隍・文宣王釈奠は古今に

ひろく通行する国家の常典であり、規式どおりに挙行する。

(2) 円丘は天子祭天の礼であるためこれを廃止する。

(3) 諸神廟および諸州郡の城隍はそれぞれ神牌を設置して守令に祀らせ、奠物・祭器・酌献の礼はすべて明の礼制による。

(4) 春秋の蔵経・百高座法席・七所親幸道場・諸道殿の神祠・醮祭等はすべて廃止する。

(5) 平壤府に檀君・箕子を祀らしめ、前朝高麗の惠宗・顯宗・元宗・忠烈王は麻田郡の高麗太祖廟にあわせ祀る。

朝鮮王朝の開創にあたり、礼曹は宗廟・社稷祭をはじめ円丘壇祭<sup>23</sup>、檀君祭祀、高麗王氏祭祀<sup>24</sup>などさまざまな問題を提起しており、以後、朝鮮王朝の国家祭祀の制度化に際しては重要な指針となる。そしてこの指針は、洪武帝の礼制改革を彷彿させる。明では洪武帝が即位するや礼制改革が進行し、洪武三年（一三七〇）には朝廷の祀廟政策をうたった詔が出され、祭祀体系の制度化は『洪武礼制』（頒行年は不明）と『大明集礼』（一五三〇年）の編纂によってひとまず完了した。明の礼制改革に遅れること二〇余年、朝鮮でも新王朝の開創と同時に祀廟政策の一大指針が示されたのである。ここで注目したいのが冒頭にある、古今通行の常典とみなされた文宣王積奠と郷村社会との関係である。

地方の文宣王積奠は教育制度の整備と表裏の関係にあり、王朝政府ではとくに重視された祭祀儀礼のひとつであった。その証左として、王朝開創直後の次の記録をあげることができる。

一、学校風化之源、農桑衣食之本、興学校以養人才、課農桑

以厚民生、

一、文宣王積奠祭及諸州城隍之祀、觀察使與守令、豐潔奠者、以時舉行、自公卿至于下士、皆立家廟、以祭先代、庶人祭於其寢、其余淫祀、一皆禁斷、(『太祖実録』卷二、元年九月壬寅〔二四日〕条、都評議使司裴克廉・趙浚等上言二二条)

当時、最高の議決機関であった都評議使司の裴克廉（一三二五—一三九二）らは時務二二条を提出して太祖の裁可を得たが、右に引用した史料はその第一条と第二二条に相当する。まず第一条では学校を興して人材を養成すること、農業と養蚕を課して民生を厚くすることを掲げる。そして第二二条では、文宣王積奠および諸州の守護神を祀る城隍祭<sup>25</sup>は觀察使・守令に舉行せしめること、上は公卿より下は士までみな家廟を立てさせ、祀典（国家祭祀のリスト）に規定のない淫祀を禁断するよう上言した。もちろん、都評議使司の上言がただちに地方文廟儀礼の浸透を意味するわけではない。こころみに、権近の「延安府郷校記」をみてみよう。

B（前略）辛未（恭讓王三年、筆者註）夏、吾同年鄭君達蒙為是府教授官、始至、無所於寓、仮浮屠宮、聚童蒙以教、未幾而罷、明年壬申（太祖元年、筆者註）我朝鮮受命而興、尤重文治、復命鄭君以教授之任、仮館如初、講勸益力、慨然有營饗舍之志、越三年甲戌（太祖三年、筆者註）春、鄭中訓易為宰而來、君告其意、鄭侯悅從、偕相旧基、經始其役、乃建東廡三楹、適丁母憂、李通政晟代至、君亦曰、(中略)李侯曰諾、毎以衙日、点閔州吏及里長于郷校、就役其人、鳩材匠工、堅明倫堂、修東西廡、新作南廊、有厨有庫、有房有門、復聚

諸生以揖讓講誦於其中、又施二十石稻、存本取息、以永誦書油費、唯先聖之廟、將建八尺方屋、斲材埴瓦鄭重、而未及宮、李侯亦見代、(後略)『陽村集』卷二二、記類、延安府鄉校記)

この史料Bは高麗末から朝鮮初にかけての延安郷校(黄海道延白郡延安邑)の再興過程をよく伝える。<sup>(27)</sup>恭讓王三年の夏、教授官として延安に着任した鄭達蒙は寺院を借りて童蒙の教育にあたり、王朝交替後も再度教授に任じられて講学につとめた。しかし、依然として延安に学舎がないことを嘆いていた。太祖三年の春には鄭中訓が守令として赴任すると、鄭達蒙は学舎建設の意向を伝え、守令の同意を得て東廡三間を建設した。鄭中訓に代わって延安に着任した李晟もまた、鄭達蒙の意向を快諾した。そして李晟は明倫堂を建設し、東西廡を修理するなど、かつては寺院を借用した延安郷校を復興するに至る。ところが、先聖を祀る廟殿は材木と瓦まで準備しておきながら造営にはおよばなかったという。王朝草創期における鄉村社会の実態を示す限られた事例のひとつとはいえ、当時は学校施設としての郷校の再興が第一義であり、祭祀機能は教育機能に付随するものであったことを示唆する。家廟制にしろ、およそ一世紀を経た成宗代(一四六九〜九四)に至っても一部の士大夫層に履行されたにすぎず、鄉村社会にまでは浸透しなかったことがすでに明らかにされている。<sup>(28)</sup>とはいえ、さきにもた礼曹による祠廟政策の指針、都評議使司の上言、そして延安郷校の再興過程とをあわせて考えれば、朝鮮政府が建国直後にすぐさま文宣王積奠の制度化を志向していたことは読みとれよう。

一方、王都の文廟に関しては着々とその制度化が進む。次の記

録にみるように、太祖四年一月には文廟祭の樂章を改定することになった。

奉常寺啓、今當国初、一新旧制、已改宗廟樂章、其社稷・圓丘・文宣王等祭樂章、尚循旧制、亦宜改作、上從之、(『太祖実録』卷八、四年一月丙子(一六日)条)

奉常寺は、旧制を一新すべくすでに宗廟祭についてはその樂章を改めていたため、社稷・円丘・文廟祭の樂章もまた改定するよう要請し、太祖の裁可を得た。文廟祭が宗廟・社稷祭、そして円丘壇祭祀と並ぶ重要な国事行為であったことを知らしめる。すでにこの年一〇月に太祖は文廟の造営を命じており、同年一二月には役事の監督を成均館と校書館に命じている。<sup>(29)</sup>太祖三年の漢城遷都以後、宗廟・社稷壇の地の選定を終えると、太祖は王朝国家にとって重要な祭祀儀礼の整備に着手したものとみてよい。文廟の竣工は太祖七年七月、造営の責任者は驪興府院君閔霽であったと伝える。<sup>(30)</sup>

文廟の完成から二ヶ月後に第二代朝鮮国王として即位した定宗(位一三九八〜一四〇〇)も、文宣王積奠の重要性を即位の教書のなかで明らかにした。

一、宗社之祭、當盡誠敬、陳設酌獻之具、務要精潔、礼文樂章、務要中節、毋敢不恭、

一、文宣王、百王之師、積業之礼、當致精潔、毋或不虔、  
一、箕子受封朝鮮、実基風化、前朝始祖、統合三韓、俱有功東民、宜置祭田、以時致祀、(『太祖実録』卷一五、七年九月丁亥(一五日)条、便民事宜)

第一条は王朝国家にとつては最大の国事行為である宗廟祭と社

稷祭、そして第二条が「積葉之礼」についてである。文宣王は百王の師であり、「積葉」すなわち積奠の儀礼をつつしんで行うよう念を押す。これにつづく第三条では、朝鮮に封じられて民の教化につとめた箕子と三国を統合した高麗太祖については祭田を支給してよろしく祀るべしとあり、便民の事宜は全三二条におよぶ。この全三二条のうち、積奠の儀礼を宗廟・社稷の儀礼について二番目に取りあげたところからみても、王朝国家の積奠重視は容易に推測できよう。

この頃の郷村社会に眼を転ずれば、太祖七年（一三九八）春に咸鏡道南部の永興に赴任した東北面都巡問使孫公は、その日がちょうど上丁であったことから積奠をみずから行った。また、太宗元年（一四〇一）春に京畿南東部の利川に着任した監務辺仁達もかつては寺院を利用して利川郷校を移建し、翌年の八月上丁には新築の聖廟において積奠の礼を実施したことが記録に残る。太祖代末から太宗代（一四〇〇ー一九）初にかけて、各地の郷校は教育機能のみならず、祭礼機能をも回復しつつあったのではないかと思われる。

同じく太宗代のはじめごろに全羅道の全州では「積奠儀式」を翻刻し、権近がこれに跋文を寄せている。<sup>(36)</sup>次の史料Cにみるように、権近が新刊の「積奠儀式」に寄せた跋文の後半からは全州における積奠儀の成立事情、そしてその普及を通して教化政策に取り組む儒者官僚の姿勢をうかがうことができる。

C（前略）建文庚辰之歲（一四〇〇年、筆者註）、全羅道觀察使咸公、倬州累積奠之失儀、報聞于国、求得儀文於成均、將録諸梓、以囑府尹柳公、公亦樂從之、未幾廉使趙公代咸公繼

至、董功益力、時判官許君嘗在成均、講究是礼、甚悉者也、觀其所得儀文、未全、乃白趙公、更報于国、始得寧国全文以刊、又以元朝至元儀式附之、是其節次先後、於文公所欲改正者、蓋庶幾焉、故今成均遵用之、以是附于寧国之書、積奠礼文、粲然咸備、悉為成書、可伝於後、（後略）（『陽村集』卷二二、跋語類、新刊積奠儀式跋）

権近の跋文によれば、全羅道觀察使咸公は州累の積奠儀が不備であることをいたみ、成均館所蔵の積奠儀を得てその翻刻を全州府尹柳公に委嘱した。柳公はこれを快諾したが、まもなく按廉使（觀察使）が趙公に交替すると、かつて成均館に在職した判官許稠（一三六九ー一四三九）<sup>(37)</sup>の協力を得ることができた。ところが、積奠儀に詳しい許稠の指摘によって成均館所蔵の儀文もまた不備であることがわかり、趙公を通して再度漢城に儀文を求めた。これにより全州ではじめて寧国府学所刊の「積奠儀式」全文を翻刻し、元の至元年間に定まった積奠儀をこれに附したという。<sup>(38)</sup>この史料Cは王都と地方の連携を示す数少ない事例であるが、全州における「積奠儀式」の翻刻とその事情からみて、全羅道の文廟儀礼に対する認識は高かったようである。

## 二 対明交渉と祀典の改革

### 1 積奠の整備と対明交渉

さて、文廟祭に限らず、朝鮮初期の祭祀儀礼の整備が本格化するのには太宗代であり、積奠の儀註制定とその事情についてもまずは太宗代の記録に求めなければならない。『太宗実録』を徴すれ

ば、太宗一一年（一四一一）四月に積奠の儀礼を詳定するよう命じた記録がみえる。

D 命詳定積奠儀、且致祭於箕子、礼曹参議許稠啓曰、臣嘗朝上国、過闕里、見積奠儀、與今国家所用之儀、互有同異、請加考証、又請祭箕子、上曰、未及箕子者、尚皆致祭、独於箕子之聖不祭、何歟、自今宜祭之、（『太宗実録』卷二一、一一年四月丁巳〔二七日〕条）

右の史料Dは典型的な綱目体をとる。この日の決定事項は積奠儀の詳定と箕子祭祀の下命であり、その細目が礼曹参議許稠の啓以下にある記録である。許稠はかつて太宗七年に賀正使に書状官として随行したが、その際、孔子の郷里である闕里（山東省曲阜）で実際に積奠儀をみる機会にめぐまれたという。ところが、朝鮮の積奠儀は明の祭儀とは異なることがわかり、そのため朝鮮の積奠儀に考証を加えるよう太宗に要請して許された。許稠が『世宗実録』五礼のうち、吉礼の撰定にあたった中心人物であり、また権近門下の礼学者であることはいうまでもない。

では、朝鮮初期の積奠はいかなる過程を経て定着するのであるうか。とくにその際、朝鮮側は明の制度といかに調整したのであるうか。そこで、ここでは積奠の整備をめぐる明との交渉経緯を追究し、そのうえで太宗代の祀典改革のもつ意義について考察することにしよう。

そもそも、文廟祭の儀註・祭服・楽器等は朝鮮のまったく独自のものというわけではない。朝鮮の儒者官僚は明の現行制度、それ以前の中国の古制、そして高麗の礼制を参考・斟酌しつつ新王朝の礼制を整備していった<sup>(42)</sup>。とくに王都の成均館の場合、明から

の使節がたびたび文廟に拝謁するため、王朝政府は明との外交関係配慮して文廟の制度整備を進めていたと考えてよいだろう。というのも、すでに太宗五年四月には恭安府尹許応（？）（一四一一）を明に派遣して宗廟・社稷・籍田・文廟等などの祭服・楽器類の輸入許可を明の礼部に願ひ出ている。このとき礼部に送った咨文をみてみよう。

E 就咨礼部曰、擬議政府状啓、備奉常寺呈照得、本寺所掌四時祖廟・社稷・籍田・文廟等祭、陪臣祭服及楽器等物、悉皆損旧、似難応用、理宜赴京収買、換新備用、具呈状啓、得此切詳、上項祭服・楽器、不敢擅便赴京収買、理合咨稟、煩為奏達、如蒙允許、隨後差人齎価、赴京収買、以備応用、（『太宗実録』卷八、五年四月癸酉〔八日〕条）

一種の変体的漢語漢文を含む咨文（中国との外交文書）であるが、奉常寺↓議政府↓朝鮮国王↓礼部の順に要請事項が伝達されていることがわかる。まず、祭服・楽器等を管理する奉常寺は、宗廟・社稷・籍田・文廟等で使用する陪臣の祭服・楽器類がみな破損して久しいため、明の都に赴いてあらたに購入したものを祭礼に使用したい、と議政府に申し出た。議政府はこの件を国王太宗に上申したところ、祭服・楽器類は赴京したところで簡単に購入できるものではない、と太宗は判断する。そこで、まずは事前に礼部に願ひ出ることしたのである。そして、もし允許をこうむれば朝鮮から使者を派遣して購入させ、奉常寺に備えさせることにしたい、という内容である。

この咨文に対する回答を、『明太宗実録』は次のように記録する。

F 朝鮮国王李芳遠（朝鮮太宗、筆者註）遣倍臣許応等奉表貢方物及馬、謝立世子恩、芳遠復奏、洪武中蒙賜廟社樂器及倍臣祭服、年久損敝、乞再頒賜、上命工部製樂器賜之、祭服令本国自製、礼部言、樂器原賜編鐘・編磬各十六、琴・瑟・笙・簫各二、今議琴・簫各倍之、庶協和音律、從之、〔明太宗実録〕卷四三、永樂三年六月庚午〔六日〕条

永樂三年（朝鮮太宗五年）六月、太宗永樂帝は樂器については工部に命じて制作させたうえで下賜するが、祭服は本国つまり朝鮮で作るよう命じている。さきの史料Eとあわせて考えるなら、文廟等で使用する祭服・樂器類もかつて洪武年間に明より賜ったものであったことがわかる。

ところが、朝鮮側のこの年の『太宗実録』には、明側の史料Fにみた永樂帝の允許に関しては記録を欠く。許応の帰国を伝える記録は残るものの、むしろ表文の形式に対する礼部の指摘が取り沙汰されている。

恭安府尹許応回自京師、通事李子映啓曰、礼部進臣等言曰、凡表文、皇帝陛下四字之下、不連写他字礼也、今爾国表文、四字之下、連書睿哲二字非也、且汝国山川之祀、孰主之乎、対曰、国王主之、曰、然則祭神樂器、陛下之所司也、今咨文曰、儼蒙依允貿易、樂器豈民間所有之物乎、汝国自高皇帝時所失非一、陛下特垂慈不問、詳記此言、言于汝国王、上乃下文書応奉司提調唐誠及郎序韓尚徳・權堧・尹珪・曹正・梁仲寛于巡禁司鞠之、以事干主文大臣、且考古今録、陛下之下連書者頗多、故数日而放、〔太宗実録〕卷一〇、五年八月辛未〔八日〕条

通事李子映の報告によれば、皇帝への表文には「皇帝陛下」の四文字の下に他の字を連書しないのが通例であるが、「睿哲」の二文字を記していたため、礼部がこの点を責めたという。これにより、文書応奉司<sup>④</sup>の長官である唐誠（一三三七―一四一三）らは巡禁司（義禁府の前身）に下されたが、古今の記録を調べたところ、連書の例が多いことから数日後には釈放された。朝鮮初期の対明外交文書をめぐるトラブルは多いが、われわれの関心からすれば、この史料のなかで見逃せないのは樂器の輸入に対する礼部の回答である。史料Fに対応する回答そのものはおよそ一年遅れで朝鮮に伝わる（後掲史料G）が、李子映は礼部からのもう一点の指摘を朝鮮国王太宗に伝えた。それは朝鮮側の樂器に対する認識不足である。祭礼の樂器は皇帝の統制下にあつて、民間で売買されてはいない。朝鮮が明に対して樂器の輸入許可を要請すること自体が誤りであつた<sup>⑤</sup>。朝鮮国王のこうした誤りは、太祖洪武帝の治世年間よりしばしばあつたが、永樂帝は慈悲によりこれを不問に付したという。

その樂器は翌年の太宗六年閏七月に明使朴麟・金禧らによつてもたらされた<sup>⑥</sup>。太宗はすぐにでも樂器を賜りたかつたようだが、病のため王世子に百官を率いて明使一行を迎えさせた。明使は今回持参した公文は礼部の咨文であつて、必ずしも出迎えの必要はないことを伝え、「若し賜樂を以て重きと為せば、則ち某等王京に至りて館に舍かん。疾の癒えるを俟ち、館に至りて受くるも亦た豈に不可ならんや」との配慮で、樂器はいったん大平館に保管された。その四日後、太宗は明使が宿泊する大平館へ向かう。

G ①上率百官、詣大平館、親受賜樂、前導至昌德宮、使臣隨至、

上拝賜礼、訖以体未平復、命議政府宴使臣于大平館、②礼部咨曰、先該、朝鮮国王咨、本国宗廟・社稷樂器損旧、咨稟奏達、如蒙允許、隨後差人齎餽、赴京收買、以備応用、移咨到部、查得、本国樂器、洪武年間、太祖皇帝曾經頒賜、今稱損旧、民間別無造売、難准所行、永樂三年六月初八日早、本部官具奏、節該奉聖旨、樂器與他、欽此、已經欽遵、移咨工部成造去後、今准造完、覆奏移咨、差内史朴麟等齎奉、同將樂器管送前去、合行、本国知会、照數收用、③計發去祭祀樂器、編鍾一十六箇、編磬一十六片、琴四張、瑟二床、笙二攢、簫四管、④議政府率百官上箋、賀受賜樂器、命止之、(『太宗実録』卷一二、六年閏七月庚午〔一三日〕条)(史料中の番号①)④は筆者)

太宗はまず大平館で永樂帝より下賜された樂器を授かり、昌徳宮にて拝賜礼を行った。しかし、太宗は体調不全を理由に迎接の宴を議政府に命じ(史料G①)、祝賀の礼を主導したのも議政府であった(史料G④)。史料G②の「礼部の咨に曰く」以下の記録をさきの『明太宗実録』の史料Fと比較すれば、回答遅延の事情は容易に理解できる。礼部はすでに永樂三年六月に永樂帝に上奏して允許を得ていたが、永樂帝は工部に樂器の製作を命じており、その製作完了をうけて朝鮮国王に回答することにしたからである。病をおしてまで大平館へ赴いたところからみても、太宗が国家祭祀に使用する樂器の下賜をいかに待ち望んでいたかは容易に想像できよう。<sup>50)</sup>翌年、新築なった成均館の文廟に孔子と四聖(顔子・曾子・子思・孟子)の神位が奉安され、孔門の十哲は東西の翼室に、そして歴代の從祀諸賢は東西の兩廡に列せられた。<sup>51)</sup>

さて、朝鮮国王が礼部に願ひ出たのは祭服・樂器の輸入許可ばかりではない。太宗一一年四月の記録(史料D)にみたように、太宗は文廟稷奠儀の詳定を命じたが、同年一二月には祭儀そのものの頒降を明に請うた記録がみえる。

H遣参贊議政府事鄭擢・参知識政府事安省、如京師、賀明年正也、且咨礼部曰、本国祖廟及社稷・山川・文廟等祭、未知聖朝所制藩国儀式、仍用前代王氏旧礼、深為未便、上項祭礼、理合奏請、如蒙頒降、欽依遵守、(『太宗実録』卷二二、一一年一二月甲子〔七日〕条)

この史料Hはこれまでにいくつかの先行研究に引用されたが、ここでは一歩踏み込んで朝鮮と礼部のあいだで取り交わされた咨文の分析をこころみ、明の対応と朝鮮側の対処に注目してみよう。議政府参贊事鄭擢(一三六三―一四二三)と同参知事安省(一四二一)を明に派遣したのは明年の正月を慶賀する儀式に参加するためであったが、このときの賀正使には礼部への咨文を持参させている。この礼部宛の咨文によれば、明が制定した「藩国儀式」は未見のため、朝鮮では宗廟・社稷・山川・文廟等の祭儀は「まだ高麗の旧制を用いているという。そこで礼部を通して「藩国儀式」の頒降を請い、その遵守を誓ったのである。ただし、誤解のないようにいえば、この咨文にいう「藩国儀式」とは『洪武礼制』を指すのではない。朝鮮では太宗即位年一二月に礼曹が『洪武礼制』の規定によって祀典所載の名山・大川を祀るよう上言した記録がある。<sup>52)</sup>社稷祭にしろ、太宗六年六月にやはり『洪武礼制』を遵用し、開城以下の各道各官に社稷壇を設けて祀ることを決定済みである。<sup>53)</sup>ついで太宗九年七月、礼曹は文宣王と四聖十

哲の神牌を『洪武礼制』所載の社稷壇制にならって製造するように上啓した。<sup>(56)</sup>つまり、少なくとも太宗が即位した一四〇〇年には『洪武礼制』はすでに朝鮮に伝来していたと考えられる。<sup>(57)</sup>したがって、ここにいる「藩国儀式」とはおそらく冊封体制下の侯国（藩国）に向けて明が制定した儀註を指すのであろう。実際にはそうした儀註はないのだが、朝鮮側は明国内の府州県に適用した『洪武礼制』以外に礼書があるのであれば、これを参考に各種祭祀儀礼の整備をはかろうと考えたに相違ない。<sup>(58)</sup>

そして、さきにみた史料Hに対する明側の回答が次の史料Iに明確に示されている。

I 任添年・崔得霏、回京師、添年等啓曰、皇帝待臣等甚厚、各賜誥命一道・内厩馬三匹・宝鈔四千張・白銀一百兩・段絹各七匹、其齋來礼部咨曰、近准朝鮮国王咨開、本国祖廟及社稷・山川・文廟等祭、未知聖朝所制藩国儀式、仍用前代王氏旧礼、深為未便、上項祭祀、理合奏請、如蒙頒降、欽依遵守、移咨到部、永樂十年三月初二日、本部官於奉天門題奏、奉聖旨、只從他本俗、恁礼部行文書去、著他知道、添年等進毛子二匹・色絲・甘草、（『太宗実録』卷二三、一二年五月丙戌〔三日〕条）

鄭擢一行は所期の目的を果たすことができずに帰国したが、礼部の咨文は彼らの赴京直後に明へ派遣された任添年と崔得霏に託された。礼部の回答によれば、永樂一〇年（朝鮮太宗一二年）三月にこの件を上奏したところ、宗廟・社稷・文廟等の祭祀については本俗、つまり朝鮮の風俗・慣習にしたがうことを許可する聖旨を賜ったという。ここで想起されるのが、のち太宗一六年六月

に下季良（一三六九―一四三〇）が「儀は本俗に従い、法は旧章を守るを許す」という洪武帝の詔書を根拠に、円丘壇祭祀の復活を太宗に要求することである。<sup>(59)</sup>実際に『明太祖実録』には「從其自為声教」「其礼従本俗、使自為声教」「儀従本俗、法守旧章」とみえ、朝鮮王朝の開国後、洪武帝は朝鮮の儀礼・法制については朝鮮の実状に即して制定することを再三にわたって許可している。いずれも明帝の余裕と寛大を示す表現であるが、朝鮮国王にとっては積奠儀を本俗にしたがって制定する名分を獲得したことになる。

以上の対明交渉の経緯をみると、朝鮮国王太宗は明の永樂帝に対して積奠で使用する祭服・楽器の下賜を要望していたことがわかる。すでに洪武帝がこれらの祭器類を下賜した前例もあり、太宗はこの前例を踏襲したのであろう。そして実際に、太宗は永樂帝より楽器を下賜された。さらに太宗は祭服・楽器のみならず、祭儀そのものの下賜を明に請うた。折しも、朝鮮の積奠儀は明の祭儀とは異同がある、と許稠が指摘したために太宗は積奠儀の制定を命じていた。そこで積奠儀の制定に参考とすべく「藩国儀式」の頒賜を明に請うたところ、永樂帝は祭儀については本俗にしたがって制定することを許可した。ここに朝鮮国王は朝鮮の風俗・慣習にしたがって国家祭祀の制度化を推進することが可能となったのである。これにより、朝鮮では積奠の制度整備が本格化することになる。

## 2 太宗一三年の祀典改革

祀典とは王朝国家が公式に行う各種祭祀に関する規範ないし規

定をいい、朝鮮成宗代に成立した『国朝五礼儀』のように体系化された一書を指す場合と、ある時点で王朝国家が認定した国家祭祀のリストを指す場合とがある。ここでは、朝鮮初期においては祀典の一大改革期にあたる太宗代後半を中心に積奠儀の制度化、とりわけ地方の積奠を中心に検討することにした。

王都と各邑の積奠が朝鮮初期の国家祭祀体系のなかに明確に位置づけられたのは、太宗一三年四月である。

丁礼曹上諸祀之制、啓曰、謹按前朝詳定古今礼、社稷・宗廟・別廟為大祀、先農・先蚕・文宣王為中祀、風師雨師雷師・靈星・司寒・馬祖先牧馬步馬社・禘祭・七祀・州県文宣王為小祀、臣等歷稽古典、前朝參酌得中、但風師雨師、自唐天宝年間、論其濟時育物之功、陞入中祀、并祭雷師、終唐歷宋無敢議者、皇明洪武礼制、增雲師、号曰風雲雷雨之神、與山川城隍、同祭一壇、今本国遵用此制、且文宣王、在国学為中祀、在州県為小祀、於義未安、故宋制州県積奠、亦陞中祀、伏望風雲雷雨之神、陞入中祀、山川城隍同祭、州県積奠、亦陞中祀、其余諸祀等第、一依前朝詳定礼、從之、(『太宗実録』卷二五、一三年四月辛酉(一三日)条)

右の史料丁によれば、礼曹は二種の礼制改革を要請している。第一点は、高麗では小祀に位置づけられた風師・雨師・雷師に雲師を加え、風雲雷雨として中祀に昇格させること。そして、第二点が邑の文廟祭を王都の祭祀と同格扱いとして中祀に昇格させることである。高麗毅宗代(一一四六―七〇)に成立した『詳定古今礼』(逸文のみ残る)では、邑の文廟祭は小祀に規定されていた。しかし、国学つまり成均館の文廟祭が中祀であるにもかかわ

らず、各邑の郷校で実施する文廟祭を小祀とするわけにはいかなかった。もとより宋制の「州県積奠儀」もまた中祀に昇格しているからである。ここにいる宋制とは北宋の『政和五礼新儀』(一一一三年)を指すのであろう。『政和五礼新儀』によれば、文宣王は中祀であり、この礼書は「州県積奠文宣王儀」を収録する。<sup>(63)</sup>これより二年前の太宗一一年正月に礼曹は老人星祭の制度化に際して宋制を導入することを上書しており、宋制の参考と導入は特殊な例ではない。<sup>(64)</sup>

太宗代のこの史料丁は、朝鮮初期の礼制改革ではひとつの画期をなす。私見では、『世宗実録』五礼の吉礼に収録された国家祭祀体系に関する諸規定は、太宗代末年までに撰定を終えたものとみている。<sup>(65)</sup>太宗代の大祀・中祀・小祀の変遷を追究すると、『詳定古今礼』の祭祀体系を基礎にして、まず太宗一三年四月に風雲雷雨と各邑の文宣王を中祀に昇格、同年一一月に檀君・箕子・高麗始祖を中祀に編入、ついで太宗一四年八月には嶽海瀆・名山大川をそれぞれ中祀・小祀に編入する。<sup>(66)</sup>そして、この編成は『世宗実録』五礼所載の大祀・中祀・小祀の編成と一致する。したがって、『世宗実録』五礼所載の国家祭祀体系は太宗一四年八月にはほぼ制度化を完了していたと判断できる。さらに、太宗代後半の一連の礼制改革を後押しした背景には、永樂帝が朝鮮の祭儀については本俗にしたがうことを許可したという名分がある(史料I)。だからこそ、太宗一三年四月に礼曹は高麗の『詳定古今礼』を基本として祀典の改革に踏みきったのである。

積奠の制度化も太宗代後半の祀典改革のなかで把握することができる。翌一四年七月には「州県積奠儀」が頒布・施行され、同

時に視学儀と王世子積奠儀、そして有司積奠儀が頒行されたからである。

K 礼曹上視学儀、初、問河崙曰、予欲視国学講經取士、卿意以謂何如、崙頓首謝曰、親詣国学、人君之盛事、乃悉奉前世親詣之君、以対、上意遂定、

L 又上王世子及有司・州県積奠儀、遂頒行、(いずれも『太宗実録』卷二八、一四年七月壬午(一一日)条)

短い記録ではあるが、すべて同一日のうちに四種の積奠儀を決定している。右の史料K Lにみえる「視学儀」「王世子及有司・州県積奠儀」とは、のち『世宗実録』五札に登載される「視学酌献文宣王儀」「王世子積奠文宣王儀」「有司積奠文宣王儀」「州県積奠文宣王儀」の四儀註に対応するものとみてよい。つまり、積奠は太宗代後半に、朝鮮国王と王世子の視学觀礼の形式で行う「視学酌献文宣王儀」を頂点として、王世子を主宰者とする「王世子積奠文宣王儀」、しかるべき官僚に代行させる「有司積奠文宣王儀」、そして各邑に主宰させる「州県積奠文宣王儀」で構成、体系化されたのである。朝鮮政府が祀典の整備に本格的に着手した(史料J)のち、朝鮮国王・王世子・有司・各邑の積奠儀がおよそ一年あまりで頒布・施行されたことになる。この積奠儀の制度化の動きからみても、『世宗実録』五札の吉礼体系は太宗代後半にはほぼ定まったものと考えられる。

周知のように、太宗三年に始まる郡県制の整備によって州府郡県には位階の觀念が導入され、太宗一三年から一四年にかけて郡県の併合と郡県名の改定が進んだ<sup>(70)</sup>。祀典の改革が本格化したのもやはりこの時期と重なる。太宗代の王権強化、祀典の体系化、そ

してまた地方統治政策を考えるうえで、太宗一三年四月の史料Jのもつ意義は大きい。

太宗代後半の積奠についていまひとつ銘記すべきは、朝鮮半島の最南端に浮かぶ済州島の事例である。『東国輿地勝覧』(成宗一二年、一四八一)の増補版である『新增東国輿地勝覧』によれば、済州には太祖元年に学校が建てられたという。太宗二年(一四〇二)には高麗以来の星主(国王)と王子(副王)の爵号を廃して左都知管・右都知管と改めており、太宗一六年五月になると済州都安撫使吳湜・前判官張合らの啓により、漢拏山の南方九〇余里(朝鮮里は日本里の一〇分の一)の地を二つに分けて東を旌義、西を大靜とし、それぞれに県監を置いた<sup>(71)</sup>。王朝政府による郡県整備の結果、従来の一七県を統廃合したものである。

そして、太宗代最末期の一八年四月には次の史料Mにみるように「済州文宣王積奠儀」が詳定された。

M 礼曹上済州文宣王積奠儀及漢拏山祭儀、積奠儀依各道界首官例、漢拏祭依羅州錦山例、載諸祀典、春秋致祭、(『太宗実録』卷三五、一八年四月辛卯(一一日)条)

礼曹は済州で施行すべき文宣王積奠儀を太宗に上啓した。その積奠儀は各道の界首官の例によって祀典に登載し、漢拏山祭儀とともに春秋に二回の祭祀を実施することにしたのである。この済州積奠儀の詳定は、王朝政府による教化が王土の辺境にまでおよんだことを示す事例といえよう<sup>(72)</sup>。というのも、界首官とは各道で行政および軍政の要地となる比較的大きな邑、つまり地方行政の上級区画であって、太祖二年一月に朝鮮半島南部を中心に二五ヶ所を設置、世宗代(一四一八―五〇)には北方の両界にも設定

してその数は三七ヶ所におよぶ<sup>(75)</sup>。済州の積奠儀が界首官の例にならって制定されたのであれば、太宗一八年の時点で、少なくとも上級行政区画の界首官は積奠を定例の祭祀として実施していたことになる<sup>(76)</sup>。また、『世宗実録』五礼のうち、吉礼については太宗代末年までに撰定を終えていたことを勘案すれば、済州に対する積奠の制度化は各邑のなかでも最終段階に位置するとみて差し支えないであろう。

### 三 郷村社会における積奠の実相

#### 1 世宗代の積奠

前節でみたように、太宗一三年から翌年にかけて邑の積奠は中祀に昇格し、その儀註が頒行された(史料J1)。地方の郷村社会で催される文廟儀礼は、太宗代後半にいちおうの制度化を終えたとみてよい。そこで次に、世宗代を中心に積奠の実施をめぐる王朝政府と郷村社会の動きを追究することにしよう。

世宗代の場合、郷村社会における積奠に関する事例は実録記事にはほとんど残っていない。しかし、次の昌平(全羅北道潭陽郡昌平面)の事例は世宗代の積奠の様子をわずかに伝える。

N一、昌平県令宋復言、告者養老之目有四、養三老五更、一也、子孫死於国事、則養其父祖、二也、要致仕之老、三也、養庶人之老、四也、有虞氏以宴礼、夏后氏以享礼、殷人以食礼、周人修而兼用之、一歳之間、凡七行之、飲養陽氣則用春夏、食養陰氣則用秋冬、大合学則必遂養老、故春入学而合弊則行之、春頒学而合声則行之、季春天子視学則行之、此王道之不

可不重也、願令攸司立養老之礼、悉令中外、每歳春秋積奠之後、扱七十・八十以上、勿拘貴賤、聚而饗之、以広聖上養老之恩、且乞善言而施諸政治、則人倫厚而風俗正、天道順而陰陽和矣、僉議、令礼官稽古制施行、(『世宗実録』卷一〇、二年一月己巳〔五日〕条、諸道守令及閑散人所上便宜事款)

議政府・六曹は諸道の守令および閑散人の要請事項一九条を採択して世宗に上啓した。このなかに「願わくは、攸司をして養老の礼を立てしめ、悉く中外をして毎歳春秋の積奠の後に七十・八十以上を扱ひ、貴賤に拘ることなく聚めて之を饗せしめ、以て聖上の養老の恩を広めんことを」とあるように、昌平県令宋復は毎年春秋の積奠後に養老儀を実施するよう請うた。養老には三老五更(在地の長老)を養うなど四種の法があり、中国古代の虞は宴礼、夏は享礼、殷は食礼とし、周では一年におよそ七度これを行った。学校関係でいえば、春の入学、秋の成績評価、そして天子視学の際にも養老の儀礼を実施したこと<sup>(77)</sup>から、宋復は王道を強調しつつ、王都と各邑でそれぞれ養老儀を制度化すべきであるという。そこで議政府と六曹で審議した結果、礼官に古制を検討させて施行するよう、国王世宗に要請する運びとなった<sup>(78)</sup>。

前節で検討したように、王朝政府は太宗一四年七月に州県積奠儀を頒行し(史料J1)、のち済州に対しては界首官の例に基づいた積奠儀を制定した(史料M)。よって、太宗代後半期には上級行政区画の界首官レヴェルでは積奠が実施されていた、と判断した。この一連の動きと昌平県令による養老儀の要請(史料N)から判断すれば、春秋の積奠は上級の行政区画のみならず、世宗初年には下部の行政区画である県レヴェルでも実施されたところが

あったとみてよいだろう。さらに、特殊な事例ではあるが、全州では州県積奠儀の頒行以前に成均館と連携して「積奠儀式」を翻刻しており（史料C）、上級行政区画における積奠儀の実施は太宗初年にまでさかのぼることができる。

では、世宗代の地理志からは一定の情報を得ることができであろうか。そこで、『新撰八道地理志』（世宗一四年、一四三二）を骨子として編纂された『世宗実録』地理志をみてみよう。

○文廟「在州北、国家於各道州府郡県、皆置文廟、謂之郷校、其生徒之額、留守官五十、牧・都護府四十、郡三十、県十五、給祭田・学田・奴婢各有差、都護府已上、皆有教授官、郡県或除教授官、或除教導、若民戸不滿五百者、亦置学長、以訓生徒、後於各邑不復書文廟」（『世宗実録』卷一四八、地理志、京畿広州牧）（史料中の「」内は割註、以下同じ）

『世宗実録』地理志は三三四の邑を記載するが、史料Oの末尾に「後於各邑不復書文廟」とみえるように、文廟に関する記録があるのは中央官衙の漢城府と開城府、地方では右に掲げた京畿の広州牧に限られ、これ以外の邑では文廟に関する記録は省略されている。世宗一四年当時、戸数が八〇〇〇を越えていた大都市ともいふべき平壤でさえ、「文廟」の項目を立てていながら文廟を解説する割註は付されていない。これ以前に成立した『慶尚道地理志』（世宗七年）にも慶尚道各邑の文廟についての独立項目はなく、関連事項として「薛聰、（中略）本朝以其功、配享文廟」と「安珦、（中略）本朝配享文廟」の二件を記すのみで、地方の積奠に関する情報はきわめて乏しい。のち、睿宗元年（一四六九）に国王の命をうけて上納された『慶尚道統撰地理志』は『慶尚道

地理志』の調査項目を補うべく編纂されたため、文廟関連の記事さえ収録しない。となれば、世宗代の地理志からの情報としては、まず第一に生徒の定員、祭田・学田・学奴婢の支給の格差をあげることができる。第二に、都護府以上の郷校には必ず教授官を派遣するが、それ以下の郡県では教授官または教導を派遣し、五〇〇戸以下の邑には学長を置いて教育にあたる。邑の等級により文廟の人的構成と財政基盤に大きな格差があったことは明らかである。しかし、文廟の構造、積奠の主宰者など郷村社会の実状については判然としない。

このように、世宗代の郷村社会における積奠についてはその情報が限られるといわざるをえない。むしろ、世宗代には王都漢城の積奠に関する施行細則が古制を参考に綿密に練りあげられていたことを伝える記録が多い。とりわけ、世宗の治世一〇年代には文廟の祭祀を王室の祭祀儀礼である宗廟祭に準ずるものとして重視するようになり、世宗一一年五月、冕服をまとった世宗は王世子と百官を率いて成均館へ行幸し、大成殿において親しく酌献祭を執り行った。また、世宗一二年二月に礼曹は奉常寺判官朴堧（一三七八―一四五八）の上疏文をもとに積奠の祭祀を「聖賢の祭祀」にふさわしくすべく、中国系の雅楽にのっとり改訂した。朴堧は壇制・儀礼内容にわたる修正箇所を詳細に調査し、『洪武礼制』を遵用する当時の政策のあり方に対しても批判を加えるなど、国家祭祀の策定・制度化の際にも成果を残すが、このときの改訂は、朴堧がかつて中国の古制と朝鮮祭祀の現状を比較検証した長文の上疏文を提出し、雅楽の不備を指摘したことによる。

もちろん、『国朝五礼儀』の規定では王都の積奠はあくまで中祀であつて、宗廟をしのぐ祭礼として位置づけられたわけではない。祭器の場合、たとえば犠牲を載せる籩・豆の数は宗廟・社稷の各一二に対して、積奠は風雲雷雨・先農と同じく各一〇であり、大祀クラスの国家祭祀は中祀の祭礼とは一線を画している。したがって、朝鮮の場合、明の太祖洪武帝が太廟（宗廟）と同格の制度を敷いて孔子を礼遇した事情とはやや異なる。

## 2 王都と地方の格差

さて、さきにみた『世宗実録』地理志の文廟記事（史料O）は、王都と地方の文廟の格差についてはいささか具体性に欠けていた。その原因は、同書地理志が地方の文廟記事を省略したことによる。ところが、成宗代に成立した『国朝五礼儀』にはこれを補う規定がある。王都と地方の格差は、次に示すように文廟の外見的構造にある。

P 文宣王廟在都城内東、大成殿坐北南向、凡五間、前有二階、庭東西各有廡、神厨在西廡西北（州県大成殿三間、在北南向、庭東西有廡（県則無廡））（『国朝五礼序例』卷一、吉礼、壇廟図説条）（へ内は割註）

五礼の施行細則を定めた『国朝五礼序例』の規定によれば、漢城の成均館にある大成殿が五間であるのに対して、各邑の大成殿はこれを三間に縮小したものであり、とくに県レヴェルになると廟庭の東西に中国・朝鮮の歴代の名儒を従祀する東廡・西廡がない。王都と地方の文廟に構造上の格差があるのはもちろんのこと、地方のなかでも県とそれ以外の邑では歴然とした格差が存在した

のである。

ただし、右の史料Pでは各邑の文廟の構造について十分な説明がなされているわけではない。そこで、『経国大典』の施行から半年を経た成宗一六年七月の実録記事を次に掲げよう。

Q 礼曹啓、儀礼詳定内、州県之学則免祭兩廡諸位、県学并免殿上十位、唯開城府及諸道界首官、遍祭兩廡諸位、周濂溪・程明道・程伊川・朱文公四位、薛聰・崔致遠・安裕、県学以上並祭之、曹已受教、依上項詳定施行、諸道界首官則有東西廡、其余州府郡県則並無廡、周濂溪以下四位、及薛聰等三人従祀為難、（後略）（『成宗実録』卷一八一、一六年七月戊午〔二〇日〕条）

まず、成宗の教書によれば、東西の両廡に従祀された諸賢を祀るのは開城と界首官の郷校に限り、それ以外の州府郡では両廡の祭享を免除し、県レヴェルでは大成殿内の十哲の祭享まで免除した。ただし、宋の周敦頤・程顥・程頤・朱子の四位と朝鮮の薛聰・崔致遠・安珦の三位だけはすべての邑で等しく祀ることを命じた。<sup>(9)</sup>ところが、このとき礼曹は「諸道界首官は則ち東西廡有れども、其の余の州府郡県は則ち並な廡無し。周濂溪以下四位及び薛聰等三人の従祀は難きたり」と啓し、周敦頤以下の名儒を四聖の例にならって大成殿内に配享せんことを請うている。<sup>(9)</sup>『国朝五礼儀』には「県は則ち廡無し」との規定（史料P）があるものの、現状では県レヴェルどころか州府郡においても両廡の設置が遅れていたとみるほかない。さきの史料Oにみた郷校の財政基盤の格差に起因するところもある。当時は『国朝五礼儀』の頒布からすでに一〇年を経ていたが、実際のところ県レヴェルの郷校はともか

く、兩廡を設置しない邑が大半を占めていたようである。『国朝五礼儀』の規定が必ずしも現状に追いついていなかったことを示す、ひとつの証左となろう。

また、成均館の大成殿には木製の神牌を用いて先聖先師を祀ったが、平壤と開城の文廟では高麗以来祀られてきた塑像をそのまま据えていた。成宗は明の国子監でも孔子像を置いていること<sup>(92)</sup>を理由に漢城の成均館でも塑像を置きたいとの意向を示したが、承政院は「土木の肖像は浮屠に異なること無し。塑像は不可なり」とこたえて成宗を諫め、旧来どおり木製の神牌を据えることになった<sup>(93)</sup>。つまり、王都の大成殿には木製の神牌を安置したが、平壤と開城のように地方の文廟によつては塑像を据えていたのである<sup>(94)</sup>。こうした地方の事情に対して明はどのような反応を示したのであるうか。さいわい、歴代の実録には明使の文廟拝謁に関する記事が頻出する。一例として、同じく成宗代の実録記事をみてみよう。

R 遠接使許琮馳啓、天使動止、又曰、天使到平壤、謁箕子廟、行四拜礼、又謁檀君廟、行再拜礼、又詣文廟、行四拜礼、入殿上、見先聖及四聖十哲塑像、語臣曰、此與中国塑像稍異、臣曰、塑像同於道仏、故王京文廟不設像、唯木主也、正使曰、是合於礼、臣又曰、此亦當改爲木主、然其来已久、故不改耳、正使曰、元有則不妨矣、(『成宗実録』卷二一四、一九年三月癸酉〔九日〕条)

史料R中の「天使」とは、孝宗弘治帝即位の詔書を頒賜するために来朝した明使であり、正使は董越である<sup>(95)</sup>。漢城へ向かう途中、明使は平壤で箕子廟と檀君廟に拝謁したのち、文廟に詣でたとこ

ろ、孔子と四聖十哲が塑像であることに気づいた。董越の觀察によれば、「孔庭設像、皆冕而裳<sup>(96)</sup>」とあるから、平壤文廟に祀られた塑像はみな玉垂れのついた冠をつけて礼装していたようである。明使を出迎えた遠接使許琮(一四三四―九四)は「塑像は道仏に同じき故に、王京の文廟は像を設けず、唯だ木主なり」というと、明使は「是れ礼に合う」とこたえた。さらに許琮は「此れ亦た當に改めて木主と為すべきなり。然れども其の来已に久しく、故に改めざるのみ」と釈明したが、明使は「元より有らば則ち妨げず」と何らとがめていない。許琮の発言からは礼学に関する教養の高さがうかがえよう。周知のように、臨時官庁である迎接都監には礼法に熟達した官僚が配置された<sup>(97)</sup>からにはかならない。のちに平壤と開城の郷校に祀られた塑像の件がふたたび朝議にのぼるが、塑像を祀るのは高麗以来の旧制であるから、にわか木製の神牌に変更することはできないであろうとの理由で沙汰やみとなっている<sup>(98)</sup>。史料Rは王都と地方との差異、そして明と朝鮮との差異を示すだけでなく、積奠の制度化とその運営に際しては朝鮮の本俗にしたがったことを示す事例とみてよいだろう。

こうしてみると、朝鮮政府は地方の文廟によつてはその来歴を考慮して高麗の旧制を踏襲していたと考えられる。もちろん、塑像を祀る各地の郷校に対して短期間のうちにいつせいに塑像から神牌へ変更させることは、現実問題としては困難であつたに相違ない。次に掲げる星州郷校(慶尚北道星州郡星州邑)の事例は、一五世紀末から一六世紀初にかけての郷村社会の実状を伝える。

S 郷校〔在州北二里、文廟皆土像、邑人言、初郷校奴往開城大成殿、一見而還、遂塑之、甚肖〕(『新增東国輿地勝覽』卷

## 二八、慶尚道星州牧、学校条)

T文廟〔在郷校、【新增】五聖十哲、旧用塑像、牧使康仲珍改設位版〕(同書卷二八、慶尚道星州牧、祠廟条)

史料Sによれば、星州郷校では開城の大成殿の例にならって五聖十哲の塑像を作りあげたという。ただし、史料Tの【新增】以下の記録にあるように、のち星州牧使に任じられた康仲珍が五聖十哲の塑像を神牌に改めた。『新增東国輿地勝覧』の史料STからは塑像から神牌への変更時期を直接知ることができないが、実録記事によると、中宗一五年(一五二〇)正月に司諫院は星州牧使在任中に刑罰を濫用した康仲珍を諫めている<sup>(99)</sup>。したがって、康仲珍関連の記録と『新增東国輿地勝覧』の成立時期(中宗二六年)から考えれば、星州郷校における塑像から神牌への変更は中宗一五年を下ることはない。つまり、星州郷校では一六世紀初頭までは神牌ではなく塑像が祀られており、一五世紀後半に成立した『国朝五礼儀』の規定が郷村社会にあまねく浸透していたわけではなかった。開城・平壤二府の場合はさらに遅れ、塑像を撤去して神牌に改めたのは一六世紀後半の宣祖七年(一五七四)のことである<sup>(100)</sup>。

## 3 積奠主宰者としての守令

ここでは郷校で執り行われた積奠と、この定例の祭祀を主宰した守令の実態を中心に、朝鮮初期における地方行政制度と祭祀体系との関連様相を考えてみたい。

受常参視事、成均直講朴續祖・閔貞等輪対、(中略)貞啓曰、今文士甚少、請撰文臣兼差芸文館、專習文学、国家自古常養

成均生員二百人、今以年歎減一百、於国家養賢之意如何、請復旧、且州郡積奠祭、守令等慢不致意、牲・酒不豊潔、請檢覈、(後略)〔『世祖実録』卷二二、四年四月辛未〔一四四〕条〕

世祖四年(一四五八)四月に成均館直講朴續祖・閔貞らが輪対した席で、閔貞は成均館の生員と地方の積奠の実状を述べた。もちろん、ここで注目するのは後者の積奠に関する記録である。閔貞の啓によれば、守令が積奠の実施を怠って祭神に供える犠牲・祭酒は豊富でも清潔でもないことから、その検覈を請うた。世祖の裁可については記録がないため、検覈が実際に行われたか否かはにわかに判断しがたい。しかし、後日、吏曹が郷校教官の勤務評価を観察使に検覈させるよう建議したこと<sup>(101)</sup>からみて、守令の怠業はよく知られたところであり、当時は積奠ばかりか郷校の運営自体がスムーズではなかったと考えられる。世祖代(一四五五～一六八)は兵事に意を注いだ反面、教育面はおろそかとなり、郷校における教官の資質の低下がしばしば問題となった時期であった<sup>(102)</sup>。次に掲げる成宗四年(一四七三)正月の記録は同じく守令の怠業を伝えるが、さきにみた『世祖実録』の記録に比べると具体的な指摘があつて興味深い。

左通礼尹孝孫等五人輪対、孝孫啓曰、諸邑文宣王積奠・歴代始祖及社稷・厲祭所用、雖易辦之物、守令不致意預辦、毎臨祭任意代用、其慢神莫甚、請令諸邑守令、別立典祀庫、一應祭用之物、預先精備、監司每當巡行親檢、以憑黜陟、命議諸院相、申叔舟等議、請依所啓、從之、〔『成宗実録』卷二六、四年正月乙卯〔二四四〕条〕

尹孝孫（一四三一―一五〇三）の啓によれば、守令は地方の文宣王積奠のほか歴代始祖・社稷・厲祭などの祭祀で使用する祭品類をあらかじめ準備することなく、祭祀のたびに任意に代用しており、これは祭神をおろそかにする行為であるという。そこで祭器類を準備・保管するために、各邑の守令に典祀庫を設置するよう要請した。加えて、尹孝孫は觀察使に対しては巡行のたびに典祀庫を点検させ、守令の勤務評定に反映させるよう、要請する。これをうけて成宗は院相に審議を命じ、申叔舟（一四一七―七七五）らの同意を得て裁可を下した。当時は申叔舟らが院相として庶政を議決しており、このとき成宗が院相に審議を命じたのも無理からぬところである。

尹孝孫は成宗の初年から四年二月まで礼式を掌る通礼院左通礼の職にあり、睿宗元年（一四六九）には頽廢した郷校の改善を要請した経緯がある。それゆえ、郷校の実状にも明るかったようである。また、尹孝孫は「庚寅（成宗元年、筆者註）通礼院左通礼に遷り、原従功臣の号を賜はる。時に經国大典五礼儀註を撰む。孝孫亦参り修めて以て一代の典を成す」と評されるように、『經国大典』と『国朝五礼儀』の編纂に参画した人物であった。『經国大典』を朝鮮初期の基本法典とすれば、ほぼ同時期に成立した『国朝五礼儀』は基本礼典といつてよい。その尹孝孫の発言であればこそ、事態は深刻である。しかも、この年は『国朝五礼儀』が完成する前年にあたる。

同じく成宗代の次の記録をみてみよう。

U 礼曹啓、今承伝教、輪对者言有、諸邑守令不肯躬行積奠、以校生品官代之、其糾察節目、商議以啓、臣等参詳、祭享大事、

而守令不躬行、甚不可、請今後令守令躬親祀事、有故則教授・訓導行之、又有故則挾有職品官、報觀察使代行、觀察使以時檢効、從之、（『成宗実録』卷四六、五年八月庚戌〔二八日〕条）

成宗の伝教をうけた礼曹は守令に対する糾察の節目を協議し、その結果を成宗に啓した。輪对の際に、守令が積奠をみずから行わず、校生（郷校の生徒）や留郷品官に代行させているとの発言があつたためである。礼曹は、王朝国家にとって重要な祭享を守令が担当しない実状を批判する。そして礼曹は、今後は守令に直接祭祀を執り行わせるよう徹底させ、やむを得ない場合には教授（従六品）と訓導（従九品）がこれに代わり、さらにその教授・訓導も不可能であれば有職の品官を招び、觀察使に報告したうえで代行するよう要請した。あわせて觀察使には檢察・弾劾権を与えるよう請うている。

このように、世祖代以降には守令の怠業、とりわけ積奠の任務を放棄する守令の問題が王朝政府内で繰り返し取りあげられた。おそらく、こうした守令の実態は郷村社会ではよくみられた光景であつたと思われる。だからこそ、朝鮮八道の長官である觀察使に檢察・弾劾権を与えるに至つたのである。

#### 4 積奠の運営とその実態

では、觀察使の教授に対する檢察・弾劾権とは、具体的にいかなるものであつたのだろうか。次にその事例として、郷校の教授が職務遂行に際して私的な利益を貪つたために罪を問われた事件を取りあげよう。舞台となつたのは清州郷校（忠清北道

清州市)である。『新增東国輿地勝覽』には、

郷校〔在州東二里、正統甲子（世宗二十六年、筆者註）春、我世宗幸椒水、賜書籍〕（同書卷一五、忠清道清州牧、学校条）

とあり、世宗二十六年（一四四四）に国王より大全經書のほか通鑑訓義・性理群書・近思錄・通鑑綱目・柳文・通鑑節要・集成小学・絲綸集各一件を賜ったことが実録記事に残る。通常、新設の郷校には教育上必要と認められる書籍が下賜されたが、清州郷校の場合には行幸という特別な事情から賜ったのであろう。この郷校で私罪を問われたのが清州教授である。

司憲府、拋忠清道觀察使啓本啓、清州教授朴榮孫、積奠陳設白布三十尺・草茵十葉・草席八葉、祭後自家輸送罪、蒸米二十斗分與金興道・林衆何罪、以奴子稟余米辦酒食、求索板子於民間罪、徵丘史麻六束、造魚網罪、郷校奴婢所納塩三十斗、自家収用罪、律該従重杖七十、奪告身二等録案、私用物色還官、校生高繼興・吳順孫告訴師長罪、順孫為首決杖一百・徒三年、繼興以随従杖九十・徒二年半、並黜郷、事在赦前、然各人所犯深重、不可全釈、請順孫・繼興永永停挙、遠方付処、榮孫収告身録臧案、永永叙用、命榮孫罷職、順孫・繼興永永停挙、〔成宗実録〕卷六七、七年五月庚戌〔八日〕条）

百官の糾察を掌る司憲府が忠清道觀察使の啓本をもとに、清州教授と校生の処罰に対する最終判決を国王成宗に仰いだ記録である。司憲府は清州教授朴榮孫に対しては告身（職牒）を奪ったうえ、姓名と罪状を臧案（臧汚人録案）に記録して今後は官職への任命を行わないこと（永永叙用）を、また校生の高繼興・吳順孫

には科挙の受験資格を永久に与えないことを要請する。校生二人の罪状は直接的には積奠に関わるものではない。しかし、清州教授の場合、祭神に供える白布三〇尺のほか菓製の敷物類を積奠終了後に私第に持ち帰った罪が問われている。本来、積奠の儀礼はこの幣帛を祭文とともに土中に埋めて終了する。清州教授の行為は積奠の遂行と管理に関わる問題であり、郷校の奴婢が納めた塩三〇斗を私第に収用したことなど余罪も多い。『大明律』に照らせば杖七〇の罪に相当し、よって告身二等を奪い、私第に収用した物品は官に還納させるべきであるという。「永永叙用」とあるから、司憲府の清州教授に対する処分は厳しい。これをうけた成宗は最終判決として罷免を命じた。

朴榮孫は罷免という一種の懲戒処分をうけたのちも不遇であった。というのも、成宗一〇年五月に朴榮孫は利川教授を更迭された。清州教授在任時に犯した罪の多くは程度の低い浅はかな行為である、と司諫院正言柳仁濠に弾劾されたためである。さらに成宗一六年九月にも司諫院献納李承健（一四五二―一五〇二）が星州教授に叙用された朴榮孫の更迭を請い、その数日後に大司諫（司諫院の長官）の韓堰（一四一八―九二）と司憲府掌令の李誼もまた星州教授の罷免を訴えて成宗の裁可を得た。理由は同じく朴榮孫が清州教授在任時に貪った不正行為である。この星州教授の罷免を最後に、朴榮孫は実録記事から姿を消す。すでに世宗代より京外の教授は社会的に閑職と軽視される風潮があり、成宗代には中央の成均館から地方の郷校に至るまで教授としての資質と実力をともなわない者が多く叙用されている。清州教授の事件とその後の任免も、朝鮮初期の郷村社会における郷校と教授官の実

状を物語る事例といえよう。

この事件を地方祭祀制の側面からいま少し掘り下げてみよう。周知のように、教授官は都護府以上の邑に、郡以下の邑には訓導官が派遣されており、教授・訓導は守令を補佐する立場にあった。では、教授・訓導は具体的にどのような守令を補佐したのであろうか。各邑の積奠の場合、祭祀に携わる献官の規定は次のようである。

V州県積奠、初献官「守令」、亜献官、終献官、東西従享分献官各一、東西廡分献官各一〔県則無〕、祝、掌饌者、執尊者〔毎尊所各一〕、執事者〔随位酌定〕、賛者、謁者、賛引四〔県二〇〕亜終献官・分献官、以佐貳官・教授・訓導及本邑閑散文官差、祝以下諸執事、皆以学生充）〔『国朝五礼序例』巻一、吉礼、齊官条〕

『国朝五礼序例』によれば、原則として守令が積奠の初献官を担当し、亜献官・終献官、ならびに従祀者に祭酒を捧げる分献官を担当するのは佐貳官（各官司の次官）・教授・訓導および当該邑に居住する閑散の文官である。祭文を読みあげる祝以下の祭官は学生（校生）が担当する。これ以前の『世宗実録』五礼の規定では、守令が初献官を担当すると明記していたが、教授・訓導に関する具体的な記述はなかった。<sup>(16)</sup>ところが、『国朝五礼儀』の段階ではより詳細で体系的な献官規定が盛り込まれ、各邑の教授の役割も明確となった。つまり、教授・訓導もまた献官の一員として積奠の主宰者である守令を補佐する立場にあり、朴榮孫は清州教授の職にありながら、積奠終了後に祭品を持ち帰った罪を問われたのである。清州の場合、牧使・判官・教授各一名が中央から

派遣されたから、史料Vの規定にしたがえば、毎年春秋の積奠では清州牧使が初献官を、次官の判官が亜献官を、そして教授が終献官を担当する。さきの史料Uにみたように、守令に対して積奠の実施を徹底させ、やむを得ない場合には教授・訓導に代行させることを決定したばかりであったから、積奠と郷校の運営に携わる清州教授の不正はのちに利川・星州に転じても弾劾の対象となり、ついに現職に復帰することはなかったのである。

このように、各邑では積奠をはじめとして守令が初献官として祭祀儀礼を主宰することが多い。そのうえ、王都漢城には社稷壇・文廟・厲壇が設置されており、これらの王都での祭祀を頂点として邑ごとに社稷・文廟・厲祭を制度化している。<sup>(17)</sup>そのため、『国朝五礼儀』の規定にしたがえば、守令は仲春・仲秋（陰暦二・八月）の最初の戊の日に当該邑の社稷壇へ、同じく仲春・仲秋の最初の丁の日には文廟へ詣でて定例の祭祀を執り行い、そして春三月の清明節と秋七月一五日・冬一〇月初一日には厲壇へと向かわなければならぬ。<sup>(18)</sup>それだけではない。こうした定期的な祭祀儀礼のほかに、蝗害が発生すればその駆除のために酬祭を、長雨がつづけば晴天を祈願する祭祭を実施するのやはり守令の任務である。<sup>(19)</sup>加えて、各地に点在する名だたる岳海瀆と歴代始祖を祀る場合、『国朝五礼序例』には「献官〔觀察使、若祭所非一、分遣守令〕」とあって原則的には觀察使が献官となつてこれらの祭祀を主宰するが、祭所の数が多い地方であればその邑の守令を代理として派遣する。

守令の献官としての任務は過重である。これを裏打ちするかのよう、成宗一六年正月より施行された『経国大典』は觀察使の

守令に対する勤務評定を次のように明記する。

W凡祭祀、守令或不躬行、器皿或用陋汚、奠物或用残余者、郷校間閣不修葺、教官供饋不用心者、觀察使檢察、以憑殿最、(同書、卷三、礼典、雜令条)

この条文は、觀察使が地方の祭祀管理者としての守令に対して勤務評定を行うことを義務づけたものである。その基準は、守令が祭祀をみずから担当しなかった場合、粗末な祭器・祭供品を使用した場合、郷校の各種施設を修理しなかった場合、そして教官の供応に意を尽くさなかった場合、の五項目である。郷校はすべての邑に設置され、守令は郷校の文廟で積奠を主宰したから、右の条文は朝鮮八道の積奠の実施にあまねく適用されることになる。

しかし、『経国大典』の施行前後には觀察使や守令が郷校の実態を檢察しなかった実例が実録記事に散見する。『経国大典』施行以前の状況に限ってみても、たとえば成宗元年正月には守令・教官の怠慢によつて郷校の管理・運営が円滑でないことが朝議にのぼる。さらに同年二月には守令・教官ばかりでなく、觀察使に対する監督権の強化も問題となった。礼曹による郷校の現状報告を次にみてみよう。

礼曹啓、諸邑儒生数少、学舎頽廢、師生或有僑寓私第、觀察使不致察、有違国家興学之意、儒生依旧、勿令定额、学舎頽廢、觀察使巡審、役人吏・日守、無弊繕修、從之、(『成宗実録』卷三、元年二月庚午〔二二日〕条)

郷校の儒生は少なく学舎も頽廢しているため、教官・儒生は私第に仮住まいするうえ、觀察使もその檢察をおろそかにしているという。そこで礼曹は、学舎の頽廢については觀察使に郷校の巡

審を徹底させ、人吏(衙前)・日守(官隸)に役事を命じて修理するよう請うた。すでに検討済みではあるが、のち成宗五年八月には教授・訓導に対する檢察・弾劾権を觀察使に与えることが決定する(史料U)。

成宗初年のみならず、『経国大典』の施行直前にも積奠の実施状況をはじめとして、郷校の運営上の問題点が指摘されている。

X御夕講、講前漢書、至公孫弘上書、風化由内而及外、陛下建首善興学校、檢討官宋軼啓曰、三代以上尚矣、自漢以下、皆敦学校、而人才多從此出、今成均館・四学、則猶有風教之化、郡県郷校、則守令慢不之察、学舎頽敝、儒士無教、而士習日壞、且積菜之時、犧牲・蔬果、徒為文具、請降諭諸道、申明之、侍講官金宗直啓曰、臣曾為守令、設郷射・郷飲之礼、使孝悌者先之、才芸者次之、不肖者與焉、由是一郷之人、企而化之、恥而改之、頗有小補於風化、以此觀之、若積菜・郷飲・郷射之礼、亦不可廢也、上曰、此皆諸道監司之責也、當申明之、○下書于諸道觀察使曰、学校風化之源、所係至重、近年以来、視為余事、不甚致慮、漸至陵夷、至為未便、興学之方、曲盡措置、(『成宗実録』卷一五七、一四年八月丙子〔一六日〕条)

夕刻に開かれた経筵の席で、檢討官宋軼(一四五四―一五二〇)と侍講官金宗直(一四三一―九二)が「積菜」、つまり積奠を取りあげている。宋軼の啓によれば、王都の成均館と四学はその風教を維持してはいるが、地方の郷校では学舎は頽廢し、教官も教育に熱心ではないという。そのうえ、春秋の積奠では祭神に供える犠牲・蔬果も形式的になりがちであることから、宋軼は各道の

実態を明らかにするよう要請した。<sup>(24)</sup> つづいて、嶺南出身の性理学派（士林派）の中心人物である金宗直は、みずからの守令の経験をもとに上啓した。これ以前、金宗直は咸陽郡守在任中の治世を高く評価され、成宗はその論賞として三品職を叙授し、承文院参校兼知製教に任命している。<sup>(25)</sup> まもなく金宗直は帰養を許されて善山都護府使を命じられ、毎月朔望にまず先聖に拝謁し、ついで郷飲酒儀を行い、春秋には養老儀を実施して善山の教化につとめた。その金宗直が教化政策上、積奠と郷射・郷飲酒の儀礼はすこぶる重要であると強調するのである。積奠はいうまでもなく、郷射儀と郷飲酒儀も『国朝五礼儀』の軍礼と嘉礼にそれぞれ明文化されており、礼制上（あるいは理念上）、この時点ではすべての邑で実施することになっていた。<sup>(26)</sup> にもかかわらず、金宗直の発言に「積菜・郷飲・郷射の礼の若きは、亦た廃すべからざるなり」とあるのは、牧民官としての豊かな経験に裏打ちされた自負心もあるが、同時に当該時期の郷村社会における文廟儀礼の軽視、もしくは衰退の実状を示すものであろう。これをうけて成宗は「此れ皆な諸道監司の責なり。當に之を申明すべし」とこたえ、各道の觀察使の責任を追及する。そして当日、郷校衰退の事態を重くみた成宗は、諸道の觀察使に興学の方途をつまびらかに処置するよう、すぐさま命を下した。<sup>(27)</sup>

さきの『経国大典』礼典の雑令条（史料W）は、成宗代はじめのこれら一連の決定事項を集成・明文化したものとみてよいだろう。王朝政府は地方祭祀の運営・管理を守令に一任し、さらにこれを觀察使に監督させた。地方行政体制はもちろん、祭祀体系の面でも地方の統制をはかるべく、王権を頂点とする中央集権的統

治体制を整備したのである。ところが、地方の郷村の実状は、必ずしも王朝政府の思惑どおりに運んでいなかった。朝鮮初期の基本法典である『経国大典』の規定は、はからずも制度（理念）と実態の乖離を露呈した結果となった。基本礼典の『国朝五礼儀』の規定も、これはあくまでも王朝政府が各種祭祀の指針として定めた制度である。それゆえ、成宗一二年には文廟の祭器が『国朝五礼儀』の規定とあわないことから、礼曹が祭器の改鑄を要請した記録もみえる。<sup>(28)</sup> 実態が制度に追いついてはいなかったことを露呈する事例である。さらに成宗一四年になると、成宗自身が發議者となって『国朝五礼儀』の改訂が取り沙汰される。<sup>(29)</sup> 朝鮮政府は中国歴代の諸般の制度を摂取したものの、慣習・風俗の相違から制度と実態に齟齬をきたすようになり、制度そのものの見直しははかられたのであった。

## むすび

以上、朝鮮初期における積奠の運営とその実態を、王朝政府による制度化と郷村の対処を軸として考察してきた。とくに目配りしたのは、積奠の制度化をめぐる対明交渉と、王朝政府による地方統治政策、そしてその理念と実態である。以下、これまでの考察の結果を要約することで結論に代えたい。

高麗後期に朱子性理学が受容され、高麗政府は王都開城の成均館を頂点に地方の郷校においても孔子を祀る文廟儀礼を導入した。地方の積奠の実態については史料の制約もあって定かでないが、伝存する郷校記から推して、高麗のすべての邑単位で『高麗史』

礼志の規定に則った積奠を実施していたとは即断できない。教育機能がまずは優先され、祭礼機能を果たす東西兩廡の設置は遅れがちであった。朝鮮王朝開創直後には礼曹が祀典の策定・制度化の指針をまず示し、教育制度の整備と相俟って積奠の制度化が進む。地方の郷校でも文廟の設置を急いだ事例が散見するものの、学校教育施設としての明倫堂の再興がやはり第一義であった。

朝鮮政府は積奠のモデルをまずは明の現行制度に求めた。権近門下の礼学者許稠が曲阜での見聞をもとに積奠儀の改正を要請したからにはかならない。太宗は明へたびたび使節を派遣し、積奠の儀註をはじめ祭服・樂器の下賜を皇帝に請う。しかし、明が冊封体制下の侯国に向けて制定した積奠儀はない。樂器は洪武帝の先例にならって永樂帝より下賜されたが、「儀は本俗に従う」とを許された。積奠の本格的な制度整備はここに始まる。

太宗代における礼制改革はその一三年四月にほぼ方向づけられたとみてよい。礼曹の上啓により、かつて高麗の『詳定古今礼』では小祀に定められていた邑の積奠は宋の制度に準じて中祀に昇格し、王都の成均館で実施する積奠と同格の扱いとなった。ただし、「儀は本俗に従う」とはいえ、礼曹は中国歴代の古制という宝庫を最大限に活用して祀典の改革を行った。そして翌年七月には「州県積奠儀」が頒布・施行され、ここに各邑に対する積奠儀の徹底がはかられた。同時に朝鮮国王による視学酌献儀と王世子・有司による積奠儀が制定され、太宗代後半には国王を頂点とする孔子崇拜儀礼が体系化されたとみてよい。そして、この一連の動きは太宗代における郡県制の一大改革と連動していたと考えられる。当時は、少なくとも上級行政区画の界首官レヴェルでは積奠

が実施されており、積奠儀の徹底の最終段階とみられるのが済州における積奠儀の制定である。その直後に済州郷校では守令を補佐する教授官の増員・派遣も決定する。

つづく世宗代の場合、王都の積奠の施行細則が次々に決定した反面、地方の積奠に関する記録はきわめて限られる。しかし、全羅道の昌平県令が積奠後に養老儀を実施するよう要請した記録からみて、世宗初年にはすでに下部行政区画の県レヴェルでも積奠を実施するところがあったと考えられる。全羅道の場合、全州では太宗代に許稠の協力を得て「積奠儀式」を翻刻しており、積奠をはじめとする儒教儀礼はやくから重んじられた地域であったとみてよいだろう。王都と地方の文廟の格差については世宗代の地理志にも記載はあるが、構造上の差異に関してはむしろ『国朝五礼儀』の規定から明らかとなる。王都と地方ではまず大成殿の規模が異なり、『国朝五礼儀』の規定に反して大成殿の東西に兩廡を設けない州府郡もあった。また、王都の成均館では木製の神牌を祀るのに対して、開城や平壤のように高麗の遺制を踏襲して孔子像を据えたところもある。ただし、来朝した明使がこれをとがめることはなく、積奠の制度化とその運営については「儀は本俗に従う」ことを許された事例として注目に値する。

世祖代になると、積奠を実施しない守令が批判にさらされる。犠牲・祭器の代用どころか積奠それ自体の代行さえ目立つようになり、その結果、成宗代に王朝政府は觀察使の守令に対する監督権を強化するに至る。しかし、郷村社会の現状はいえ、教官の資質の低下にともない、郷校の衰退は明らかであった。不正により解任された忠清道の清州教授が、その後二度三度と別の邑の

教官として復職した事例があり、地方に派遣される教授の資質と能力には疑問が多い。教授職を忌避する社会的風潮を露呈した事例ともいえる。守令の怠業については別の要因が考えられる。地方で実施する積奠の場合、その主宰者は守令であって、以下、佐貳官・教授・訓導がこの文廟儀礼を補佐する。しかし、守令が主宰するのは春秋二回の積奠にとどまらず、春秋二回の社稷祭に加え、清明節と秋冬二回の厲祭を主宰しなければならない。しかもこれらは守令に課せられた最低限の定期的な祭祀儀礼である。臨時の祭祀として蝗を駆除する酺祭もあれば、晴天を祈願する禳祭もあり、祭祀主宰者としての守令の任務は過重であった。『経国大典』に明記された守令に対する監督権強化の条文は、当時の郷村社会の実状を映す鏡であつたのではなからうか。

王朝政府は地方祭祀の運営・管理を守令に一任し、さらにこれを觀察使に監督させることによって王権を頂点とする中央集権的統治体制を整備した。王朝政府が積奠に代表される広域の祭祀組織とその主宰者を地方行政機構のなかに取り込むことによって地方の統制をはかつていたことは疑いない。ただし、これはあくまで統治者側からみた、あるべき理念である。たしかに『国朝五礼儀』と『経国大典』の規定は王朝政府の政策理念を示すものではあるが、実態が必ずしも理念どおりであつたわけではない。積奠を通してみた場合、むしろ朝鮮初期の基本礼典と法典は理念と実態の乖離、つまり王朝政府の理念と郷村社会の実態がかけ離れていたことを示すものではないかと考えられる。王朝政府は郷村社会を統制すべく、儒教社会としてあるべき姿を『国朝五礼儀』と『経国大典』に投影したのである。

〔付記〕 本稿は、一九九八・九九年度科学研究費補助金（奨励研究 A、研究課題「李朝初期の在地社会からみた国家祭祀運用体系」、課題番号一〇七一〇一七五）による成果の一部である。

## 註

- (1) 桑野栄治「李朝初期の祀典を通してみた檀君祭祀」（『朝鮮学報』第一三五輯、朝鮮学会、一九九〇年四月）、同「檀君祭祀儀礼の分析」（『年報朝鮮学』創刊号、九州大学朝鮮学研究会、一九九〇年一二月）、同「李朝初期における高麗王氏祭祀」（『年報朝鮮学』第二号、一九九二年三月）、同「李朝初期における国家祭祀——『国朝五礼儀』吉礼の特性」（『史淵』第一三〇輯、九州大学文学部、一九九三年三月）、同「高麗から李朝初期における円丘壇祭祀の受容と変容——祈雨祭としての機能を中心に」（『朝鮮学報』第一六一輯、一九九六年一〇月）。

- (2) 通行本に李離和解題『国朝五礼儀』（景文社、서울、一九七九年三月影印）があるが、本稿では「嘉靖三十一年」（明宗七年、一五五二）の内賜記を有する名古屋市蓬左文库本『国朝五礼儀』八卷八冊（請求番号は一六七一一四）を併用した。また、とくに断らない限り、儀註（祭祀の式次第）を収録した『国朝五礼儀』八巻と、祭祀の施行細則を収録した『国朝五礼序例』五巻をあわせて『国朝五礼儀』

と総称する。

- (3) 丁淳佑・池斗煥他編『朝鮮時代儀礼資料集成』全五冊(韓國精神文化研究院、城南、一九九七年七月)。

- (4) 朝鮮初期の国家祭祀研究の一定の水準を示すものとして、五礼研究の嚆矢となった李範稷『韓國中世礼思想研究—五礼를 中心으로—』(一潮閣、서울、一九九一年九月)、五礼のうち吉礼の専論である金海榮『朝鮮初期 祀典에 관한 研究』(韓國精神文化研究院博士學位論文、城南、一九九三年一月)がある。この二書については、桑野栄治「書評／李範稷著『韓國中世礼思想研究—五礼を中心—』」(『年報朝鮮学』第三号、一九九三年三月)、同「書評／金海榮著『朝鮮初期の祀典に関する研究』」(『朝鮮学報』第一六九輯、一九九八年一月)、参照。

- (5) 井上和枝「朝鮮李朝時代鄉村社会史研究の現状と課題」(『歴史評論』第五〇〇号、一九九一年一月)。

- (6) たとえば尹熙勉は、王朝政府と在地士族が朝鮮後期社会の経済的变化と社会身分制の変化に対処するために礼俗を強調し、郷校では先賢祭祀を強化することによって下層民に対する教化を強調した、とみる。尹熙勉『朝鮮後期郷校研究』(一潮閣、서울、一九九〇年三月)「第4章 郷校와 兩班儒生の 郷村活動」二〇一—二〇二頁。

- (7) 朝鮮が受容した朱子性理学の性格については論者によって異なるが、新王朝の創建を支えるための実践的・功利的側面に重点を置いた受容であった、と捉える点では一致する。宮嶋博史「朝鮮社会と儒教—朝鮮儒教思想史の一解釈—

『思想』通巻七五〇号、一九八六年二月)六一頁。

- (8) 桑野栄治「李朝初期における奉常寺の成立とその機能」(『下関市立大学論集』第三九卷第二・三合併号、一九九六年一月)。

- (9) 古くは善生永助『朝鮮の聚落 前篇(調査資料第四一輯 生活状態調査其八)』(朝鮮総督府、京城、一九三五年三月)「第五章第一節 儒教文化と同族部落」、村山智順『釈奠・祈雨・安宅(調査資料第四五輯 朝鮮の郷土神祀第二部)』(朝鮮総督府、京城、一九三八年三月)「第一編第一章 文廟祭」などの報告はあるが、植民地期当時の現況調査に比重を置く。また、서울特別市史編纂委員会編『서울特別市史(古蹟篇)』(同委員会、서울、一九六三年二月)「第一部第二章第三節II. 文廟」、同委員会編『서울六百年史(文化史蹟篇)』(서울特別市、서울、一九八七年四月)「第二章第六節 文廟」がともに沿革・建築年代および建築様式を叙述するが、概説の域を出ない。

本格的な研究としては池斗煥『朝鮮前期 儀礼研究—性理学 正統論을 中心으로—』(서울大学校出版部、서울、一九九四年七月)「第3章第1節 文廟儀礼의 整備」(原載は「朝鮮前期 文廟儀礼의 整備過程」『韓國史研究』75、서울、一九九一年二月)、および「第3章第2節 文廟從祀 論議」(原載は「朝鮮前期 文廟從祀 論議—鄭夢周・權近을 중심으로—」『釜大史学』第九輯、釜山、一九八五年六月)がある。池斗煥は朱子性理学の定着過程との関連から文廟儀礼の変遷を論じたが、朝鮮初期の対明交渉と郷村

社会の実態を視野に入れたものではなく、『国朝五礼儀』の活用もみられない(一三七―一四九頁、一六八―一七三頁)。地方の積奠の制度化については、李範稷、前掲書「第1章Ⅲ、『高麗史』礼志 五礼의 分析 1. 吉礼」(原載は『『高麗史』礼志「吉礼」의 검토』『金哲坡博士華甲紀念史学論叢』知識産業社、서울、一九八三年八月)、および「第2章Ⅲ・世宗朝『五礼』의 分析」に言及があるものの、整備過程の整理作業にとどまる(九六―九七頁、三一八―三一九頁)。一方、金海榮、前掲書「제2장 祀典의 改編推移와 整備過程」は「州県祭」のひとつとして積奠を取りあげるが、李範稷による整理を越えるものとはいえない(一四七―一四九頁)。最近では、李範稷・金鎔坤「성리학의 보급」(『한국사26(조선 초기의 문화Ⅰ)』国史編纂委員会、果川、一九九五年十二月)が一節を設けて文廟制度の整備を述べるが、分担執筆者(金鎔坤)の主たる関心は文廟従祀論にある(三九―五一頁)。また、金泰永「국가제사」(前掲『한국사26』、所収)が宗廟と社稷、自然神、文廟、歴代始祖の四節を掲げて整理したが、文廟の記述はその多くを前掲の池斗煥論文に依拠する(二三三―二三六頁)。

(10) 『高麗史』卷六二、礼志四、吉礼中祀、文宣王廟条。ただし、この儀註には「文昌侯崔致遠・弘儒侯薛聰、並南壁」とあるが、忠肅王六年(一三一九)に東廡第二位に従祀される安珦(一二四三―一三〇六)については規定がない。したがって、この儀註は高麗前期に成立したものであろう。

この点は、関内河『韓国中世教育制度史研究』(成均館大学出版部、서울、一九九二年二月)「第2章2・国子監의 設置」五二―五五頁。

(11) 池斗煥、前掲書「第3章第1節 文廟儀礼의 整備」一三八―一三九頁。

(12) 『高麗史』卷三二、世家三二、忠烈王三〇年五月己卯(二八日)条、同書卷一〇五、列伝一八、安珦伝。『高麗史節要』卷二二、忠烈王三〇年五月条。

(13) 江南地方からは書籍を購入したほか、のち朝鮮に農業技術の発達をうながす江南農法を導入した。李泰鎮『朝鮮儒教社会史論』(知識産業社、서울、一九八九年三月)「제4장 一五・六세기 新儒学 정착의 社会經濟的 배경」(原載は『奎章閣』5、서울、一九八一年二月)七五頁。

(14) 『高麗史』卷三四、世家三四、忠肅王元年六月庚寅(八日)条。

(15) 『高麗史』卷六三、礼志五、吉礼小祀、諸州県文宣王廟条。なお、献官とは広義の概念としては祭儀に従事するすべての人々を指すが、狭義には神主に祭酒を捧げる初献官・亜献官・終献官の三献官を指称する(李範稷、前掲書「第1章Ⅲ、『高麗史』礼志 五礼의 分析」九二頁)。

(16) 『東文選』(学習院大学東洋文化研究所、一九七〇年七月影印。底本は蓬左文庫本)卷七一、記、寧海府新作小学記。『稼亭集』(『影印標点 韓國文集叢刊』3、民族文化推进会、서울、一九九一年四月、所収)卷五、記、寧海府新作小学記。高麗末期の郷校の施設とその運営については、渡

部学『近世朝鮮教育史研究』（雄山閣、一九六九年三月）  
 「第三章 書堂の展開過程」一四一～一四五頁、朴賛洙  
 「高麗時代の郷校」（『韓国史研究』42、서울、一九八三年  
 九月）六〇～六三頁。

- (17) 『陽村集』は『韓国文集叢刊』7にも収録されるが、本稿では初刊本を底本に影印した朝鮮史編修会編『陽村集（朝鮮史料叢刊第一三）』（朝鮮総督府、京城、一九三七年三月）より引用した。また、『新增東国輿地勝覧』（中宗二六年、一五三一）卷一四、忠清道堤川県、学校条、郷校の項にも「権近記」として史料Aとほぼ同文の郷校記を収録するが、末尾の「洪武二十四年蒼龍辛未冬十有二月壬戌」を欠く。なお、朴賛洙、前掲「高麗時代の郷校」も「提州郷校記」に注目したが、己巳・辛未の干支を朝鮮太祖年間のことと誤って註釈し、『高麗史』礼志および『国朝五礼儀』の規定との関連には触れない（五四・六二頁）。

- (18) 史料Aの前略部分は以下のとおり。

提州在楊広、地最僻、民風最朴略、官為監務、秩亦甚卑、郷学廢已久、洪武戊辰（昌王元年（一三八八）、筆者註）、陞諸州、県令・監務、皆以参上官為之、且有興学令、高麗末期の提州は楊広道（のちの忠清道）のなかでも僻地にあり、小邑の提州に派遣された監務の地位と郷校の荒廃ぶりも容易に推し量ることができよう。

- (19) 『太祖実録』卷一、元年八月丁巳（八日）条。

- (20) 『太祖実録』卷一、元年七月丁未（二八日）条。

- (21) 『太宗実録』卷一六、八年九月庚申（一五日）条、閔霽卒

伝。朝鮮総督府中枢院編『朝鮮人名辞書』（同院、京城、一九三七年九月。復刻は臨川書店、一九七二年七月）一五四三～一五四四頁。

- (22) 『太祖実録』卷一、元年八月庚申（二一日）条。この上書は朝鮮初期の国家祭祀を論じる際には必ず引用された。たとえば、金泰永「朝鮮初期 祀典の成立에 對하여」―国家意識의 變遷을 中心으로」（『歴史学報』第五八輯、서울、一九七三年六月）一一一頁、韓祐勛「朝鮮時代思想史研究論攷」（一潮閣、서울、一九九六年九月）「第1章 儒教理念의 實踐과 信仰・宗教」（原載は「朝鮮王朝初期에 있어 서의 儒教理念의 實踐과 信仰・宗教」―祀祭問題를 中心으로」『韓国史論』3、서울大学校韓國史学会、서울、一九七六年八月）三～四頁、平木實「朝鮮における天神（祭天）信仰について」（同『朝鮮社会文化史研究』国書刊行会、一九八七年一月、所収。原載は『天理大学学報』第一五一輯、一九八六年三月）四二五頁。

- (23) 祭天儀礼である円丘壇祭祀はその是非をめぐる論議の末に廃止されるが、祈雨祭としての機能は雪祀を新設することによって継承された。桑野栄治、前掲「高麗から李朝初期における円丘壇祭祀の受容と変容」、参照。

- (24) 檀君祭祀はのち、古朝鮮の箕子、三国時代の始祖である東明王・温祚王・朴赫居世、そして高麗太祖王建の祭祀とともに歴代始祖祭祀として整備され、これらの朝鮮歴代の始祖神はそれぞれの由来の地に祀られた。桑野栄治、前掲「李朝初期の祀典を通してみた檀君祭祀」、同「李朝初期に

- おける高麗王氏祭祀」、参照。
- (25) 濱島敦俊「明初城隍考」(『榎博士頌寿記念東洋史論叢』汲古書院、一九八八年十一月)三四八―三五六頁。小島毅『中国近世における礼の言説』(東京大学出版会、一九九六年六月)「六章 洪武改制と明代の地方志」一〇八―一一二頁。
- (26) 朝鮮初期の城隍祭の整備過程は、박호원「朝鮮 城隍祭의 祀典化와 民俗化」(韓國宗教史研究会編『성황당과 성황제』一淳昌 城隍大神事跡記 研究)民俗苑、서울、一九九八年十二月)一四九―一六六頁に詳しい。徐永大教授(韓國・仁荷大学校)より資料の提供をうけた。
- (27) 『東文選』卷七八、記、延安府郷校記も史料Bとほぼ同文である。また、『新增東国輿地勝覧』卷四三、黄海道延安都護府、学校条、郷校の項にも「權近記」として史料Bに相当する郷校記を収録するが、李晟の治績に関しては「越三年甲戌春、鄭中訓易為宰、偕相旧基、經始其役、李通政晟代至、繼而終之」と記すのみである。なお、史料Bの前半部は郷校の成立過程を論じた先行研究にしばしば引用された(たとえば渡部学、前掲書「第三章 書堂の展開過程」一四一―一四二頁)が、筆者の関心は後半部の積奠関連の記述にある。
- (28) 韓沽昉、前掲書「第1章 儒教理念의 実践과 信仰・宗教」一八頁。
- (29) 朝鮮建国草創期の奉常寺は宗廟以下の祭祀全般を掌り、記功・贈諡・教養に関する任務も兼ねた。桑野栄治、前掲
- 「李朝初期における奉常寺の成立とその機能」二一―六頁。
- (30) 『太祖実録』卷八、四年一〇月乙卯(二五日)条、同書卷八、四年二月丙申(七日)条。
- (31) 新都漢城の選定と建設の概要は、吉田光男「漢城の都市空間―近世ソウル論序説」(『朝鮮史研究会論文集』第三〇集、朝鮮史研究会、一九九二年一〇月)九三―九七頁。
- (32) 『太宗実録』卷二〇、一〇年九月癸巳(二九日)条。『春亭集』(『韓國文集叢刊』8、所収)卷二二、碑誌、有明朝鮮国学新廟碑銘并序。『新增東国輿地勝覧』卷一、京都上、壇廟、文廟、卞季良碑銘。これ以後の成均館文廟の焼失(定宗二年)、再建(太宗七年)、増築の経過については、閔丙河、前掲書「第4章3. 朝鮮의 古典大学과 그 教科課程」一四七―一四九頁、参照。
- (33) 朝鮮初期の場合、「積業」の用例としてはこの『太祖実録』七年九月丁亥条以外に四件の実録記事が確認できる(『世祖実録』卷三六、一一年八月庚辰(五日)条、『成宗実録』卷八三、八年八月戊戌(四日)条、同書卷一五七、一四年八月丙子(一六日)条(後掲史料X)、同書卷二六八、二三年八月己未(二一日)条)が、いずれも積奠と同義に用いている。中国古代では「積業」は積奠の略式礼であったが、唐代になると本来の意義は失われて「積業」は積奠の雅語として使用された(弥永貞三「古代の積奠について」坂本太郎博士古稀記念会編『続日本古代史論集』下巻、吉川弘文館、一九七二年七月、三八五―三八六頁)。日本の場合、多久聖廟の積業はともかく、積奠が復興した江戸初

期においても両者をそれほど厳密に区別してはいない（須藤敏夫「江戸幕府積奠の成立」『国学院雑誌』第六七巻第一〇号、一九六六年一〇月、七三頁）。朝鮮初期にわずかにみえる「積菜」の用例も積奠の雅語とみて差し支えなからう。

(34) ただし、「其の廟学の隘陋にして頹腐するを觀るに、泫然として涕を出し、更に之を嘗まんと欲す」とあり、永興郷校はのちに移建して聖廟と学舎も数ヶ月足らずで完成した（『陽村集』卷一四、記類、永興府学校記。『東文選』卷八〇、記、永興府学校記。『新增東国輿地勝覽』卷四八、咸鏡道永興都護府、学校条、郷校の項）。このうち、『陽村集』および『東文選』所収の郷校記にはその末尾に「永樂癸未（太宗三年、筆者註）秋八月日」とあるから、太宗三年八月の記録である。また、孫公とは太祖七年正月に伊川郡東北面兵馬節制使永興尹に任じられた孫興宗であろう（『太祖実録』卷一三、七年正月乙卯〔七日〕条）。

(35) 『陽村集』卷一四、記類、利川新置郷校記。『新增東国輿地勝覽』卷八、京畿利川都護府、学校条、郷校の項。いずれもその冒頭に「永樂元年（太宗三年、筆者註）夏、議政府經歷司都事徐君選、以其郷利川新置郷校事始末請曰」とあるが、『陽村集』の末尾にのみ「是年六月晦」とある。したがって、この郷校記は太宗三年六月末の記録である。なお、李範穆「朝鮮前期 儒学教育과 郷校의 機能」（『歴史教育』第二〇輯、서울、一九七六年一二月）もこの郷校記に注目したが、氏の関心は郷校の財政基盤にある（二〇）

二二頁）。

(36) 『陽村集』卷二二、跋語類、新刊積奠儀式跋。『東文選』卷一〇三、跋、新刊積奠儀式跋。また、『新增東国輿地勝覽』卷一、京都上、壇廟条、文廟の項にも「権近新刊積奠儀式跋」を収録する。

(37) 後掲史料Dとして掲げる積奠儀の詳定と許稠との関わり、そして次にみる許稠の卒伝から判断すれば、かつて成均館に在職して積奠儀を講究した「判官許君」とは許稠である。

（前略）丁丑（太祖六年、筆者註）、拝成均典簿、時国家草創、未遑積奠先聖、頗違古制、稠独概念、乃白兼大司成権近、求得積奠儀式、講明改正、庚辰、拝司憲雜端、左遷完山判官、後吏曹正郎闕、太宗難其人、親閱班簿、覽稠名曰、得人矣、遂以稠為之、（後略）（『世宗実録』卷八七、二十一年二月壬寅〔二八日〕条、許稠卒伝）

また、許稠が完山（全州）判官に左遷されたのが太宗元年正月、吏曹正郎に任じられたのが太宗二年七月である（『太宗実録』卷一、元年正月乙酉〔二五日〕条、同書卷四、二年七月己酉〔二八日〕条）から、「積奠儀式」の刊行時期もこのあいだとみてよいだろう。

(38) 史料Cの前略部分には次のようにある。

古者積奠于学、其礼極簡、其詳不伝也、自唐有開元礼、宋有政和新儀、然亦靡墜、多莫之行、紫陽朱文公、每嘆於此、屢請舉行、且有志於改正其節次、而卒莫之就、寧国府学所刊儀式、乃先儒孟君之緒、取紫陽積奠儀・

湖学冕服図粹為一編、而積奠須知・滄州舍菜儀并載于後、其神位向背、器服制度、與夫登降酌獻之儀、無不備載、独所謂紫陽儀者、亦因開元之旧、文公嘗欲改正而未就者也、

これによると、寧国（安徽省宣城）の府学で刊行された儀文とは、孟之縉が朱子の積奠儀と湖学冕服図をあつめて一編となし、これに積奠須知・滄州精舍積菜儀をあわせたという。「積奠儀式」の書名は、千惠鳳解題『攷事撮要』（韓国図書館学研究會、서울、一九七四年八月影印。底本は韓国国立中央図書館蔵、宣祖一八年（一五八五）刊本）八道程途（別号冊板并附）、全羅道、六日程、全州条にみえており、この書が朝鮮前期に全州で開刊されたことは疑いない。

- (39) 正使は王世子の讓寧大君であった。『太宗実録』卷一四、七年九月乙亥（二五日）条。

- (40) 明初の積奠については、濱島敦俊「孔子崇拜儀礼（積奠）について」（『思想』通卷七九二号、一九九〇年六月）七六～八三頁、小島毅「嘉靖の礼制改革について」（『東洋文化研究所紀要』第一一七冊、一九九二年二月）三九九～四〇七頁。また、浅野裕一「孔子神話——宗教としての儒教の形成」（岩波書店、一九九七年二月）「第九章 王号の剥奪」二四七～二五一頁。

- (41) 『世宗実録』卷二二八、五礼、卷首。李範稷、前掲書「第2章Ⅰ. 朝鮮初期의 礼学」（原載は『歴史教育』第四〇輯、서울、一九八六年十二月）一七九～一八〇頁。

- (42) 『世宗実録』卷二二八、五礼、卷首。『国朝五礼儀』序（姜希孟）。『私淑齋集』（李佑成編）「栖碧外史海外蒐佚本叢書」3、亜細亜文化社、서울、一九九二年四月影印。底本は蓬左文庫本）卷一一、序、五礼儀序。

- (43) 李成茂「鮮初의 成均館研究」（『歴史学報』第三五・三六合輯、서울、一九六七年十二月）二四六頁。

- (44) 本来の使用目的は、王世子の冊封を許可されたことに謝意を表明するためであった（『太宗実録』卷八、五年四月癸酉（八日）条）。なお、簡略な叙述にとどまるが、張師勛『世宗朝音楽研究—世宗大王의 音楽精神』（서울大学校出版部、서울、一九八二年九月）「第1章 世宗 初期의 音楽」もこのときの対明交渉に言及した（四八頁）。

- (45) 桑野栄治、前掲「李朝初期における奉常寺の成立とその機能」一三一～一五頁。

- (46) 文書応奉司は外交文書の作成と保管を掌る承文院の前身。当時の対明外交文書の作成は、そのほとんどが漢文・吏文に長けた唐誠に一任された。桑野栄治「李朝初期における承文院の設立とその機能」（『史淵』第一三一輯、一九九四年三月）二五～二八頁。

- (47) のち、司訳院判事をつとめた李子暎は祭服と薬材の収買のために赴京するが、帰国途中に病死したため、祭服と薬材は同行した崔霖が持ち帰った。『太宗実録』卷二三、一二二年正月癸丑（二八日）条、同書卷二四、一二二年八月戊辰（二六日）条、同書卷二四、一二二年一〇月甲寅（二日）条。
- (48) 『太宗実録』卷二二、六年閏七月丙寅（九日）条。同日の

実録記事によれば、このとき朝鮮に派遣された朴麟・金禧はかつて朝鮮が明に献じた宦官である

- (49) 前掲恭作遺稿・末松保和編纂『訓読史文——附史文輯覽』

(国書刊行会、一九七五年一〇月復刻) 卷二、【二五】賜樂器札部咨(七一頁)がこのときの回答(史料G②)に相当する。その末尾には、「右咨朝鮮国王、永樂四年五月日」とあり、内容も一致する。ただし、史料Gの③は下賜品のリスト(別幅)であろう。

- (50) 太宗は明より下賜された樂器を王朝最大級の国家祭祀に相当する宗廟祭ではじめて使用した。『太宗実録』卷一二、六年一〇月乙未(九日)条。

- (51) 『太宗実録』卷二三、七年二月己亥(一四日)・三月乙亥(二二日)・五月己未(六日)条。

- (52) 池斗煥、前掲書「第3章第1節 文廟儀礼の整備」一四二頁。金海榮、前掲書「제1장 2. 鮮初祀典의 정비와 『洪武礼制』」(原載は「朝鮮初期 国家祭祀儀의 정비와 『洪武礼制』」『清溪史学』9、城南、一九九二年一月)五五頁。しかし、礼部の回答(後掲史料I)とあわせて分析はない。

- (53) 『明太宗実録』卷二三、永樂九年閏二月庚辰(二四日)条、同書卷二四、永樂九年正月丙戌(一日)条。

- (54) 『定宗実録』卷六、定宗二年(太宗即位年)二月壬子(二二日)条。

- (55) 『太宗実録』の原文は次のとおり。  
礼曹啓、新都城隍之神、乞就旧基、立堂以祭、從之、

漢陽府、城隍堂旧基也、又啓、按洪武礼制、府州郡県、皆立社稷壇、以春秋行祭、至于庶民、亦祭里社、乞依此制、令開城留後司以下各道各官、皆立社稷壇行祭、

允之、(『太宗実録』卷一一、六年六月癸亥〔五日〕条)

開城以下すべての邑に社稷壇を設置することにしたのは、王都の社稷制度の拡大実施を意味する。韓祐、前掲書「第1章 儒教理念의 实践과 信仰・宗教」一六―一八頁。

- (56) 『太宗実録』卷一八、九年七月丁丑(七日)条。

- (57) 『洪武礼制』については、山根幸夫解題『皇明制書』全二冊(古典研究会、一九六六年一月・六七年四月)に収録される東洋文庫本(二〇巻本)と内閣文庫本(不分巻本)に加え、蓬左文庫本『皇明制書』(二四巻本。請求番号は一三二二〇)を併用した。通行本の『皇明制書』全六冊(成文出版社、台北、一九六九年影印。二〇巻本)の第三冊にも『洪武礼制』を収録しており、金海榮はこれをテキストとして「宗廟や文廟のように比重の大きい国家的な祭祀に関する内容が欠けている」(金海榮、前掲書四三頁)、「文廟に関する規定がない」(同、七三頁)という。しかし、内閣文庫本は文廟の祭祀儀式を収録するから、朝鮮には文廟の祭祀儀式を欠いた『洪武礼制』が伝来していた、と理解すべきであろう。

なお、山根幸夫「『皇明制書』解題」(同『明清史籍の研究』研文出版、一九八九年三月、所収。原載は山根幸夫解題、前掲『皇明制書』下巻)では、「仁井田陞博士の『採訪法律資料』に拠れば、仁井田氏が北平を訪れた当時、北

平の東方文化事業総委員会図書部には、朝鮮版の三十卷本皇明制書の端本『大明令』一卷が存在していたという。朝鮮版三十卷本があったとすれば、当然中国版の三十卷本も存在していた筈である」という(一一頁)。「朝鮮版の三十卷本皇明制書の端本」とは、朴現圭『台湾公藏韓國古書籍聯合書目』(文史哲出版社、台北、一九九一年一月)「七、中央研究院歴史語言研究所善本書目中韓國古書籍」にある「皇明制書二卷／明張鹵編、朝鮮佚名重編。朝鮮後期刊本。一冊」、すなわち『大明令』一卷と『洪武礼制』一卷の残本二卷であろう(二九八頁)。「洪武礼制」の版本系統と朝鮮への伝来経路については後考を俟つほかない。

(58) 『洪武礼制』が朝鮮の礼制改革におよぼした影響は大きい。のち世宗代に礼学研究が進展すると、この礼書に対する批判が次第に高まる。明国内の州府県に適用された礼制を、明国外の侯国たる朝鮮がこれに基づいて制度整備をする必要はない、という論理である。金海榮、前掲書「제1장 2. 鮮初 祀典의 정비와 『洪武礼制』」五六―五九頁。

(59) 『太宗実録』卷二三、一二年三月辛亥(二七日)条。

(60) 任添年と崔得霏は、永樂帝から鴻臚寺の官職と禄俸を賜ったことに謝恩するため赴京した。『太宗実録』卷二一、一一年四月壬辰(二日)条、同書卷二二、一一年一月庚午(一三日)条。

(61) 桑野栄治、前掲「高麗から李朝初期における円丘壇祭祀の受容と変容」一四頁。

(62) 順に、『明太祖実録』卷二二一、洪武二五年九月庚寅

(一二二日)条、同書卷二四四、洪武二九年正月乙亥(一六日)条、同書卷二四九、洪武三〇年正月丙辰(二日)条。いわゆる「声教自由」の意味するところは、末松保和「麗末鮮初に於ける対明関係」(同「高麗朝史と朝鮮朝史」(末松保和朝鮮史著作集5))吉川弘文館、一九九六年一〇月。原載は京城帝国大学文学会編『史学論叢 第二(京城帝国大学文学会論纂第一〇輯)』岩波書店、一九四一年一月)二二〇―二二二頁、参照。

(63) 『政和五礼新儀』(『景印 文淵閣四庫全書』第六四七冊、台湾商務印書館、台北、一九八三年六月、所収)卷一、序例、辨祀条、同書卷一二六、吉礼、州県釈奠文宣王儀条。このモデルは『大唐開元礼』(池田温解題『大唐開元礼―附大唐郊祀録』汲古書院、一九七二年一月、所収)卷六九、吉礼、諸州釈奠於孔宣父条、および同書卷七二、吉礼、諸県釈奠於孔宣父条に相当する。

(64) 老人星カノープスは権力者の長寿と天下の泰平をもたらすといわれ、高麗では開城の南郊にこれを祀った。老人星祭は道教的色彩を色濃く帯びた祭祀ではあったが、朝鮮では世宗八年にはば制度化を終えて『国朝五礼儀』に定着する。桑野栄治、前掲「李朝初期における国家祭祀」一二五―一二六頁。

(65) 桑野栄治、前掲「李朝初期における国家祭祀」一二六―一二七頁。

(66) 『太宗実録』卷二五、一三年四月辛酉(一三日)条、同書卷二六、一三年一月庚辰(四日)条、同書卷二八、一四

年八月辛酉(二一日)条。

(67) 先行研究では史料Kと『世宗実録』五礼との対応関係は

明確でない。また、池斗煥は史料Lを「王世子と有司の州

県積奠儀」と解釈し、金海榮は直前の「視学儀」の制定

(史料K)には触れない。池斗煥、前掲書「第3章第1節

文廟儀礼の整備」一四三―一四四頁。金海榮、前掲書

「제2장 祀典의改編推移와整備過程」一四九頁。

(68) 『世宗実録』卷二二、五礼、吉礼儀式、視学酌献文宣王

儀・王世子積奠文宣王儀・有司積奠文宣王儀および州県積

奠文宣王儀条。このうち、視学酌献文宣王儀は臨時の儀礼

であって、王世子積奠文宣王儀以下の三礼は「春秋二仲上

丁」、つまり陰暦二月・八月の二番目の丁の日に実施され

る。

(69) いわゆる有司撰事の形式である。唐・宋では皇帝の親祭は

参列者が多く、準備も入念で多大な費用を要したこと、王

朝国家の頂点に立つて重責を担う皇帝が定期的な親祭を実

施するのは事実上不可能であること、などの理由から皇帝

親祭は稀であって、祭祀はしかるべき官員に代行させた

(梅原郁「皇帝・祭祀・国都」中村賢二郎編『歴史のなか

の都市 ―統都市の社会史― ミネルヴァ書房、一九八六年

一〇月、二九一頁。金子修一「唐代皇帝祭祀の親祭と有司

撰事」『東洋史研究』第四七卷第二号、一九八八年九月、

六九―七〇頁)。こうした事情は朝鮮初期の場合、たとえ

ば円丘壇祭祀の運営にも通じる(桑野栄治、前掲「高麗か

ら李朝初期における円丘壇祭祀の受容と変容」八―二二頁)。

(70) 李樹健『朝鮮時代地方行政史』(民音社、서울、一九八九

年九月)「第3章 朝鮮初期 地方行政制度の整備」七五

―七七頁。李存熙『朝鮮時代地方行政制度研究』(一志社、

서울、一九九〇年二月)「IV・郡県制の整備と活用」

一九二―一九六頁。

(71) 済州の郷校の沿革については次の記録が簡便であろう。

郷校「在城中、金処礼碑、我太祖元年壬申、学校成、

世宗十七年乙卯、郷校再造、(後略)」(『新增東国輿地

勝覧』卷三八、全羅道済州牧、学校条)

のち、都評議使司は済州の人材養成のために教授官の設

置を上言した(『太祖実録』卷五、三年三月丙寅「二七日」

条)。

(72) 『世宗実録』卷一五一、地理志、全羅道済州牧。『新增東国

輿地勝覧』卷三八、全羅道済州牧、建置沿革条。

(73) 『世宗実録』卷三二、一六年五月丁酉(六日)条。『新增東

国輿地勝覧』卷三八、全羅道旌義県・大静県、建置沿革条。

やや遅れて世宗二年十一月には旌義・大静に郷校を置いた

(『世宗実録』卷一〇、二年十一月己卯「一五日」条)。

(74) 太宗一八年四月には、済州の文宣王積奠儀を詳定した(史

料M)その七日後に、済州儒学教授官を増員のうえ派遣し

た記録がある。

復差済州儒学教授官、礼曹掾済州牧官呈上言、州及任

内儒生二百余人、詞訟雜務煩劇、雖以判官兼教授官、

実難教訓、請依前例別差教授官、旌義・大静学校並令

考察、以振文風、從之、(『太宗実録』卷三五、一八年

四月戊戌（一八日）条）

濟州牧使の呈によつて礼曹が上言したところによれば、二〇〇余人の儒生を抱える濟州では訴訟と雑務に忙しく、判官が教授官を兼任したものの、実状では教育にあたることは難しいという。そこで礼曹は前例により別途に教授官を任命するよう請うた。後述するように、各邑の教授官は儒生の教育以外に積奠の実施を補佐する任務がある（後掲史料V）。郷校の運営にあたる守令・教授官の任務が煩雑にして多忙であつたところにひとまず留意されたい。

(75) 李存熙、前掲書「Ⅲ. 界首官の運営」三一―三三・四七―五四頁。

(76) 先行研究は地方行政制度の視角を欠いたため、史料Mの「界首官例」の意味するところが説かれず、表面的な解釈にとどまる。李範稷、前掲書「第2章Ⅱ. 朝鮮初期の五礼運営」（原載は「朝鮮初期 五礼の運営」『애산학보』4, 서울, 一九八六年二月）二五〇頁。金海榮、前掲書「제2장 祀典의改編推移와整備過程」一四九頁。

(77) 宋復の養老に関する上言の典拠は『礼記』王制篇であろう。ただし、史料Nとして引用した実録記事には「春入学而合弊則行之、春頒学而合声則行之」とあるが、これは「春入学而合舞則行之、秋頒学而合声則行之」の誤刻と思われる。『礼記正義（十三経注疏之六）』（上海古籍出版社、上海、一九九〇年十二月影印）卷二三、王制のほか、『周礼注疏（十三経注疏之四）』卷二三、春官宗伯下、大胥にも「春入学舎采合舞、秋頒学合声」とあり、頒学は秋に学生の才芸

の高下を分かつことである。

(78) 養老儀では年に一度、仲秋の辰の日に所在官司が主人となつて八〇歳以上の長老をもてなす。『世宗実録』卷一三三、五礼、嘉礼儀式、開城府及諸州郡県養老儀条。『国朝五礼儀』卷四、嘉礼、開城府及州県養老宴儀条。

(79) ただし、『世宗実録』地理志のうち両界（平安・咸吉道）の一部の記録は、世宗が没する一四五〇年までおよび。北村秀人「『新撰八道地理志』雑考」（『朝鮮学報』第一二九輯、一九八八年一〇月）三六―三八頁。

(80) 『世宗実録』卷一四八、地理志、京都漢城府・旧都開城府。

(81) 『世宗実録』卷一四八、地理志、平安道平壤府。

(82) 『慶尚道地理志』慶州道慶州府、および安東道順興都護府。崔致遠については「高麗顯宗大平壬戌（顯宗十三年（一一〇二）、筆者註）、贈諡文昌侯」とある（同書、慶州道慶州府）が、文廟への配享に関する記述を欠く。本稿では、朝鮮総督府中枢院調査課編『校訂 慶尚道地理志・慶尚道統撰地理誌』（同院、京城、一九三八年三月）と韓国学文献研究所編『全国地理志 壹（韓国地理誌叢書）』（亜細亜文化社、서울, 一九八三年二月）所収本を併用した。

(83) 郷校運営の財政基盤となる学田の支給規定は『経国大典』には記載されず、成宗二十四年（一四九三）五月施行の『大典統録』卷二、戸典、諸田条に復活する。

(84) 教導は『経国大典』の頒布以前に訓導となり、学長も同時に廃止される。申解淳「朝鮮初期教官の実態 ― 四学・郷校教官の非教育的側面을 中心으로」（『南溪曹佐鎬博士

華甲紀念論叢 現代史學의 諸問題』一潮閣、서울、一九七七年四月）二四九頁。

- (85) 『世宗實錄』卷四四、一二年五月辛未（二六日）条。世宗一〇年代の孔子の神格化については、池斗煥、前掲書「第3章第1節 文廟儀礼의 整備」一四六～一四七頁。

- (86) 『世宗實錄』卷四七、一二年二月庚寅（二九日）条。『蘭溪遺稿』（京都大学附属図書館河合文庫蔵。請求番号は河合本一ラ一六）疏、請正祀享樂律疏。世宗代の雅樂の制定については、張師勛、前掲書「第2章 世宗 中期의 音樂」六八～七八頁に詳しい。なお、純祖二年（一八二二）刊の河合文庫本『蘭溪遺稿』の書誌は、千恵鳳編『海外典籍文化財調査目録 一河合文庫所蔵韓國本』（韓國書誌学会、서울、一九九三年八月）九二頁、参照。

- (87) 桑野栄治、前掲「李朝初期における奉常寺の成立とその機能」一四頁。同「高麗から李朝初期における円丘壇祭祀の受容と変容」二九～三〇頁。

- (88) 『世宗實錄』卷三一、八年四月戊子（二五日）条。『蘭溪遺稿』疏、請正祀享樂律疏。

- (89) 『国朝五礼序例』卷一、吉礼、饌宴尊豐図説条。

- (90) 史料Qにある受教は、のち『大典統録』に次のように載録された。

開城府及諸道界首官外、其余州府郡学、則免祭兩廡諸位、県学則並免殿上十位、唯宋朝濂溪周先生、明道・伊川程先生、晦庵朱先生、及新羅弘儒侯薛聰、文昌侯崔致遠、高麗文成公安裕、則州府郡県並皆祀之、（『大

#### 典統録』卷三、礼典、祭礼条）

- (91) 同日、成宗は敦寧府領事以上と議政府にこの件の審議を命じたが結論は出ず、さらに承政院・弘文館にも意見を求めたが、結局は再度審議することになった。

- (92) のち嘉靖九年（一五三〇）到北京の文廟では塑像を壊して木製の神牌を置くことになるが、地方の文廟ではそのまま塑像を祀ることが多かった。小島毅、前掲「嘉靖の礼制改革について」四〇〇・四一四頁。

- (93) 『成宗實錄』卷二二〇、一二年八月丙子（二九日）条。

- (94) 開城の場合、『新增東国輿地勝覽』には「大聖殿安五聖十哲塑像、東西廡有七十子及歷代諸賢位版」とあり（同書卷四、開城上、学校条、成均館割註）、平壤の場合は「五聖十哲、皆塑像」とある（同書卷五一、平安道平壤府、祠廟条、文廟割註）。

- (95) 董越の履歴とその朝鮮紀行については、朝鮮史編修会編『朝鮮賦（朝鮮史料叢刊第一五）』（朝鮮総督府、京城、一九三七年三月。底本は慶尚北道紹修書院原蔵の一卷二冊、嘉靖刊本）巻末の「朝鮮賦解説」、参照。

- (96) 『朝鮮賦』第八葉オモテ。ただし、『文淵閣四庫全書』第五九四冊所収の『朝鮮賦』はこの記述を脱落する（二〇九頁）。

- (97) 李鉉淙「明使接待考」（『郷土서울』第一二号、서울、一九六一年一月）九二頁。

- (98) 『成宗實錄』の原文は次のとおり。

御経筵、講訖、（中略）沈澮啓曰、臣向見開城府学宮大成殿、宣聖十哲塑像、或臂足断折、或彩色剥落、若

上国使臣見之、則国家尊崇之意掃地也、且塑像不合古制、改以位板何如、成覲曰、平壤学宮宣聖十哲皆塑像、且遼東泮宮設塑像、我国自前朝皆設塑像、其来已久、上曰、塑像前朝旧物、恐不可卒改、学宮其速修理、(後略)『成宗実録』卷三六、二一年正月己未(六日)条

成覲(一四三九〜一五〇四)の発言によれば、朝鮮の開城・平壤のみならず遼東の泮宮(学校)でも塑像を据えていたという。

(99) このとき司諫院は康仲珍の司贍寺正への就任を問題視した(『中宗実録』卷三八、一五年正月乙巳(一六日)条)。また、康仲珍の星州郷校での事績については『国朝文科榜目』(太学社、서울、一九八八年三月影印)卷五、燕山朝、乙卯(元年)別試榜(十一月行)条、生員康仲珍の項にも、『星州郷校、旧設塑像、仲珍改以位版』とある。

(100) 後代の史料ではあるが、英祖(位一七二四〜七六)命編の『輿地圖書』(国史編纂委員会、서울、一九七三年一二月影印)上、所収の『松都誌』は次のように記録する。

本朝宣祖七年、命撤去開城・平壤二府先聖十哲塑像、代以位版、李睟光曰、二府之塑像、蓋元時自中国来者、至是、依皇朝嘉靖之制、始撤去云、(後略)『松都誌』卷二、学校、成均館条

李睟光(一五六三〜一六二八)の言に「皇朝嘉靖の制に依り、始めて撤去すと云う」とあるように、嘉靖の礼制改革が参考とされた。これに先立ち、開城府の儒生は塑像の撤

去に反対して上疏したが、宣祖は左・右議政の議にしたがつて結局は神牌への改定を断行した(『宣祖実録』卷八、七年二月癸亥(一八日)条)。

(101) 『世祖実録』卷二二、四年四月辛巳(二四日)条。

(102) 渡部学、前掲書「第三章 書堂の展開過程」一六四頁。申解淳、前掲「朝鮮初期 教官의 実態」二四八頁。ただし、渡部論文の朝鮮初期に関する叙述は百科事典的性格の『増補文献備考』(一九〇八年、純宗二)に依拠するところが多く、年代記にズレがある。

(103) 厲は祀るべき子孫をもたない鬼神をいう。厲祭の制度化は、太宗元年に権近が『洪武礼制』に準じて施行すべし、と建議したことに始まる。桑野栄治、前掲「李朝初期における国家祭祀」一四〇〜一四四頁。

(104) 世祖の死後、睿宗(位一四六八〜六九)が一九歳で即位すると世祖妃尹氏(貞熹王后)による垂簾聴政が始まり、申叔舟らは院相として幼王を補佐した。成宗もまた一三歳で即位したため、尹氏の垂簾聴政はつづき、成宗七年(一四七六)によりやく親政となる。震檀学会編(李相伯著)『韓国史(近世前期篇)』(乙酉文化社、서울、一九六二年三月)「第一編第一章 王權의 確立」一〇二〜一〇三頁。

(105) 尹孝孫は成宗四年二月に戸曹参議となり、まもなく礼曹参議に転じた。『成宗実録』卷八、元年一二月壬戌(一九日)条、同書卷二七、四年二月戊辰(七日)条、同書卷二九、四年四月辛巳(二一日)条。

(106) 尹孝孫の上書は先代世祖の治世を批判するものとして義禁

府に囚われたが、まもなく釈放された。『睿宗実録』卷二、即位年十一月己巳(一三日)・辛未(二五日)条。

- (107) 前掲『朝鮮人名辞書』五一頁。この記述の典拠「人物考」は申用漑(一四六三―一五一九)による碑銘である。서울大学校図書館編『国朝人物考』(서울大学校出版部、서울、一九七八年二月影印)上、五六八―五七〇頁。

- (108) 『世宗実録』卷一〇四、二六年五月庚戌(一日)条、同書卷一〇四、二六年八月庚申(二四日)条。

- (109) 李春熙『朝鮮朝の教育文庫에 관한 研究』(景仁文化社、서울、一九八四年十二月)「Ⅱ. 鮮初の儒教教育과 教育文庫의 形成」八―一〇頁。

- (110) 『国朝五礼儀』卷二、吉礼、州県稷奠文宣王儀条、行礼の項。なお、幣帛の色は社稷では黒、宗廟では白、先農では青とするなど祭神によって異なるが、ほとんどの祭祀では白を用いる(『国朝五礼序例』卷一、吉礼、饌実尊疊図説条)。

- (111) 私罪杖七〇の場合、現職を罷免したうえで告身二等を収取した。この制度は世宗七年(一二二五)二月の改革によって確立し、『経国大典』卷五、刑典、推断条に定着する。

- 矢木毅「朝鮮初期の笞杖刑について」(『史林』第八二巻第二号、一九九九年三月)八九―九〇頁。

- (112) 『成宗実録』卷一〇四、一〇年五月庚辰(二五日)条。前後関係から判断すると、朴榮孫は成宗七年五月に罷職の処分を受けたが、一定の年限を満たして従六品の教授職に復帰したことになる。

- (113) 『成宗実録』卷一八三、一六年九月辛亥(三日)条。このとき、李承健は「吏曹の之を薦むるも亦た非なり。請う、之を鞠せんことを」と、吏曹の薦挙にも非があることを訴え、成宗も「當に吏曹に問うべし」と回答した。しかし、その後の実録記事には吏曹関係者の処分に関する記録はない。

- (114) 『成宗実録』卷一八三、一六年九月甲寅(六日)条。

- (115) 申解淳、前掲『朝鮮初期教官의 実態』二三四―二三八頁。

- (116) 『経国大典』卷一、史典、外官職。

- (117) 史料Ⅴに対応する『世宗実録』五礼の規定は以下のとおり。

州県稷奠行事執事官、初献官〔守令〕、亜献官、終献官、殿内従享分献官〔界首官及諸州郡県各一〕、東西廡従享分献官各一〔界首官二、諸州郡一、県学無亜献官以下行事官、以佐貳官及本貫寄居内文官充〕、祝二、掌饌者、司尊者、賛唱者、賛礼者〔界首官四、諸州郡三、県学二〕、祝以下諸執事、皆以学生充、(『世宗実録』卷一二八、五礼、吉礼序例、献官条)

- (118) 『経国大典』卷一、史典、外官職、忠清道。『新增東国輿地勝覧』卷一五、忠清道清州牧、建置沿革条。

- (119) 『国朝五礼儀』の段階では、これらは大祀・中祀・小祀の体系とは別に「州県祭」の枠組みで設定される。『国朝五礼儀』卷一、吉礼、州県春秋社稷儀条、同書卷二、吉礼、州県文宣王稷奠儀・州県厲祭儀条。『国朝五礼序例』卷一、吉礼、辨祀条。

- (120) 『国朝五礼序例』卷一、吉礼、時日条。各邑の社稷・厲祭

を主宰する献官は、以下のとおり当該邑の守令である。

州県社稷〔名山大川・祭祭・酺祭・厲祭同、唯厲祭執尊者・執事者、各加一〕、献官〔本邑守令〕、祝、掌饌者、執尊者、執事者、賛者、謁者〔祝以下、皆以学生充〕、〔『国朝五礼序例』巻一、吉礼、齊官条〕

(121) 『国朝五礼儀』巻二、州県酺祭儀・久雨州県祭城門儀条。

『国朝五礼序例』巻一、吉礼、時日・齊官条。祭祭は高麗以来の国家祭祀であるが、酺祭は宋制を導入して朝鮮初期に制度化された。桑野栄治、前掲「李朝初期における国家祭祀」一二四・一三四―一三五頁。

(122) 『国朝五礼序例』巻一、吉礼、齊官条。

(123) このとき大王大妃は守令に諭す事目の作成を都承旨に命じたが、郷校の実態に関しては次のような事目がある。

一、諸邑校生、守令不用心勸励、教官又不勤訓誨、因此無

一人專業、而教官則日與守令遊宴、甚非委任之意、

〔『成宗実録』巻二、元年正月己亥〔二〇日〕条、都承

旨李克增草事目〕

(124) 宋軼は成宗八年八月の積奠親行後に実施された謁聖文科に

乙科で及第した経歴をもつ。『成宗実録』巻八三、八年八月丁酉〔三日〕条。『国朝文科榜目』巻四、成宗朝、丁酉〔八年〕親試榜条。

(125) 『成宗実録』巻三二、四年七月丁未〔一八日〕条、同書巻

六二、六年二月癸卯〔二八日〕条。『佔畢齋集』〔『韓国文集叢刊』12、所収〕年譜、成化二十二年乙未〔成宗大王六年〕条。

(126) 嶺南大学校民族文化研究所編『嶺南古文書集成Ⅰ（民族文化研究所資料叢書第八輯）』（嶺南大学校出版部、慶山、一九九二年三月）に、「教旨／金宗直為通訓／大夫行善山都／護府使者／成化十二年七月初一日」との告身を収録する（二七頁）。また、『佔畢齋集』年譜、成化二十二年丙申

〔成宗大王七年〕条には、「臨民御吏、皆有办法、吏戢民懷、毎月朔望、先謁先聖、次行郷飲酒礼儀、春秋、設養老礼」とある。

(127) 郷飲酒儀は毎年孟冬（陰曆一〇月）に辰の日を選んで開城と州府郡県の郷校で実施し、郷射儀は毎年三月三日（秋は九月九日）にやはり開城以下の各邑で挙行する儀礼である。

『国朝五礼儀』巻四、嘉礼、郷飲酒儀条、同書巻六、軍礼、郷射儀条。

(128) 成宗代当時、地方の行政責任者が郷飲酒儀と郷射儀を忠実に実施していたわけではない。金龍徳「郷飲礼考」―成宗

代の郷約에 대하여（『東方学志』第四六・四七・四八合輯、서울、一九八五年六月）八〇―八一頁。高英津「조선 중기 郷礼에 대한 인식의 변화」（『国史館論叢』第八一輯、果川、一九九八年一〇月）一三―一五頁。平木實「朝鮮時代の郷村における儒教的教化の一側面」―郷飲酒儀礼・郷射儀礼について（『天理大学学報』第一九〇輯、一九九九年二月）一五―一六頁。

(129) ただし、成宗は郷射儀と郷飲酒儀を実践する留郷所の復活をここで許可したのではない。以後、金宗直一派は留郷所の復設を求めて成宗を説得するが、中国周代の制度にならつ

た郷射・郷飲酒儀と留郷所との関連は、田川孝三「郷案について」(『山本博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社、一九七二年一〇月)二七二～二七四頁、李泰鎮『韓国社会史研究―農業技術 발달과 社会變動』(知識産業社、서울、一九八六年四月)「제6장士林派의 留郷所 復立運動―朝鮮初期 性理学 定着의 社会的 背景」(原載は『震檀学報』第三四・三五輯、서울、一九七二年二月・七三年四月)一五六～一六二頁、参照。

(130) 『成宗実録』卷一二五、一二年正月丙戌(一一日)条。

(131) 『成宗実録』卷一六一、一四年二月辛未(一二日)条。

『国朝五礼儀』の改訂は実現しなかったが、のち中宗代(一五〇六～四四)後半にも五礼の運営に疑問が呈せられる。桑野栄治「朝鮮版『正徳大明会典』の成立とその現存―朝鮮前期対明外交渉との関連から」(『朝鮮文化研究』第五号、東京大学文学部朝鮮文化研究室、一九九八年三月)一〇～一一頁。